
とある聖人の風紀委員

本日は晴天なり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある聖人の風紀委員

【Nコード】

N1212Z

【作者名】

本日は晴天なり

【あらすじ】

白井黒子や初春飾利が在籍する『風紀委員』ジャッジメントの177支部。その支部長が上条さんと知り合いでしかも聖人で、能力者のクセに魔術使えて！？というそんなifの話です。最後までお付き合いいただけたら幸いです。更新はおそらく不規則だと思います。

第1章 何気ない日常（前書き）

初めまして。本日は晴天なりです。完全無欠の初投稿ですのでどうかお手柔らかにお願いします。あと、今回は魔術は出てきません。戦闘すらありません。とあるシリーズの時系列を順に追っていくので魔術の登場はもうしばらく先です。

第1章 何気ない日常

朝焼けが少年の寝ていたベッドを照らした。

「眠い…」

少年は自分の目にかかる朝日が鬱陶しそうにうつすら目を開け、二度寝を始めようとした。

寝起き直後のベッドは気持ちの良いものだ。

そうして再び睡魔に身を委ねようとした少年の枕元で携帯が鳴った。眠気眼を擦りつつ電話にでるとあめ玉を転がすような甘ったるい少女の声が聞こえてきた。

「支部長、朝早くから失礼します。数名の暴漢が一人の女子生徒を路地裏に連れていった、という通報がありましたので対応を——」

少女の名は初春飾利。ここ、学園都市の学生による治安維持活動『ジャッジメント風紀委員』の活動支部177支部のメンバーだ。

そしてこの電話に出た少年がその177支部の支部長、かみのまこと神野真である。

中肉中背で、一般の高校生よりは少し筋肉のついた体つき。ただ筋肉質、という印象よりは締まって見える、と言った方がしっくりくる。無造作に整えられた焦げ茶色の髪は、わずかに天然のパーマが入っており、眠そうに半開きになっている目は右が赤、左が金、と

いう特徴的な色をしていた。これは別にカラーコンタクトを入れているわけではなく生まれつきだ。

ここは学園都市。東京都の3分の1ほどの広さに人口は230万。そのおよそ8割が学生の所謂『学生の街』だ。

この街は外周を壁で囲まれ、外との交通網なども遮断されている。しかも大小様々な教育機関が揃っているこの街は科学技術も外とはかけ離れている。具体的には2、30年くらいの差がついていると言われている。

この街の特徴はそれだけではない。この街では『記録術』とか『暗記術』とか、そんなものでごまかして

『超能力の開発』

を行っている。要するにこの街では『超能力』なんて言葉は当たり前なのだ。

しかし、それによる問題も発生してくる。なまじ超能力なんて手にしてしまったが故に調子に乗ったバカどもが犯罪に走るケースも多いのだ。

そこで設立されたのが『ジャッジメント風紀委員』と呼ばれる学生による治安維持部隊と、教師による『アンチスキル警備員』と呼ばれる治安維持部隊だ。

しかし、同じ治安維持組織のアンチスキル警備員とジャッジメント風紀委員だが、ジャッジメント風紀委員の活動内容は主に校内の揉め事の処理だったりする。これは大人たち曰く、「ジャッジメント風紀委員とはいえ子供。危険な目には合わせられない。」とのこららしい。

「ん？ ああ、白井辺りを現場に回せ。たぶんすぐ終わる」

神野真は半分寝ているようなノロノロした動きで制服にきがえ、腕に緑と白のストライプで真ん中に盾のようなマークのある風紀委員^{ジャッジメント}の腕章をつけ寮の部屋を出た。

ドアを開けた直後、隣の部屋の住人が神野の開けたドアにもろに激突した。ガアアアン！！と凄まじい音が聞こえたので神野が覗き込んでみると黒い髪をツンツンに立てた少年が頭を押さえてうずくまっている。

「痛ってえ！！朝っぱらから不幸だ…」

この少年は上条当麻。神野の同級生で自称不幸な少年だ。しかし神野としてはこの少年、本人は鈍すぎて気づいていないがかなりの数の異性から好意を寄せられているため、どの辺が不幸なんだこのやろう、と問い詰めたい。

「ああ、ごめんごめん。」

と神野が謝っていると、

「？ ああ、真か。」

と上条がつまらなさそうに言う。

「どういう意味だよ？ おい、ため息つくなコラ。」

何故か上条が深いため息をついていた。

「いやね、なんかいつもお前がドア開けると俺がぶつかるから狙ってんじゃねえかと思ってさ…。」
ひどい冤罪だ。

「んな訳ねえだろ！！お前の不幸体質なんだからしょうがねえだろ
うが！！」

そう不幸。超能力ですら一般科学として認識されている学園都市。
しかし、上条当麻の日常を見た人間はみなこう思うだろう。

（ああ、何だかんだ言ってどんなところでも不幸な人はいるんだな）
オカルト

と。そんなくらいに上条当麻という人間は不幸だった。タイムセー
ルをタッチの差で逃したり、買った漫画が真ん中のページだけぐし
ゃぐしやになっていたりは当たり前。

挙げ句の果てにはバス停にいるのに無視されたり、大金が入ってい
る日に限って財布を落したりと上条の周りにいるだけで1日5回
は上条の「不幸だあああ！！」という悲痛な叫びが聞こえるくらい
だ。

まあ、傍目から見ている分には面白いのだが。

二人でならんでどうでもいいような世間話をしながら学校に向けて
歩いていると、ふと上条の動きが止まった。どうした？、と尋ねる
と上条は急に慌て出して、

「悪いっ！！俺ちょっと急ぐから！！じゃな！」

と言ってどこかへ走り去っていった。直後に

「逃げんな！！待てコラアア！！」

とかなんとか言いながら学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』
の制服を着た茶髪の少女が電撃を飛ばしながら上条が走り去ってい
った方向に走っていったのは見なかったことにしよう。

上条がどこかへ消えて1人歩いていると、目的地に到着した。ここが神野や上条が通っている高校である。

レベルもそこまで高いわけではなく、ごくごく一般的な学校を思い浮かべてもらうと良いだろう。

普段であれば制服姿の生徒たちは、今日は全員体操着だった。今日はこの学校でも『システムスキャン身体測定』が行われるからだ。

システムスキャン身体測定とは、有り体に言えば超能力のレベルを計るためのものである。学園都市の能力者は、全く能力の使えない無能力者（レベル0）から、低能力者（レベル1）、異能力者（レベル2）、強能力者（レベル3）、大能力者（レベル4）、そして最高位の学園都市230万人の頂点。7人しか存在しない超能力者（レベル5）の以上6段階がある。実質学園都市の学生の約6割が無能力者（レベル0）らしいが。

教室に向かう途中、女子更衣室のドアの前に男子数名の男子同級生が廊下に突っ立っていた（もしくはドアに張り付いていた）。

神野は苦笑いを浮かべつつ、近場のやつに何をしているのか聞いた。すると青い髪にピアスという格好の糸目のやつが首をギューン！！とこちらに向けてきた。首は痛くないのだろうか。

そいつはエセ関西弁で、

「なにゆうてはんのマコっちゃんは！！今、たった今！！この中で女子が着替えとんねん！これを覗かぬ手はあるかいっ！！」
とか言っている。

残念ながらこの男、神野や上条の同級生である。しかも学級委員。いつも青い髪とピアスをしていることから「青髪ピアス」の愛称で親しまれている。ちなみに神野はめんどくさいので青髪と呼んでいる。

「青髪。んなことしてボコられても知らねえぞ？」

「女子の着替えを覗いて死ねるなら本望！！」

そのとき、ガラッと更衣室のドアが開き、中から体操服姿の同級生、一般的な同年の女子より遥かに成長した胸部をもつが、性格の固さ故にどんな女も落とす上条ですら通用しない「対カミジョー属性完全ガードの女」こと吹寄制理が出てきた。

一瞬にして固まる男子一同。吹寄は深い深いため息をつくとき、青筋を浮かべて主犯と思われる青髪に渾身の頭突きを喰らわしていた。

身体測定も終わり、神野は帰路についていた。結局上条は先程の少女に追い回されたらしく、大遅刻の末、未だに1人で身体測定をやっていることだろう。

「さってと、今日は風紀委員も休み取ったしのんびりすっか。」

とか思っていた神野だったが、ふと見た公園に見知った顔を見つけた。

朝に電話してきた風紀委員の初春飾利と、同じく風紀委員の白井黒子がベンチに座っていた。公園のなかはどうやら学園都市見学ツアーか何かの団体に賑わっているようだ。すると向こうもこちらに気づいたようで、軽く会釈してきた。

「よっ。なにやってんだ？」

「初春がお姉さまに会いたいと常々言っていましたので今日ご紹介してたんですよ。」

と白井が答えた。この白井の言う『お姉さま』とは、常盤台中学のエースで学園都市最強の超能力者（レベル5）の1人、御坂美琴のことだろう。

「私の同級生の佐天涙子さんも一緒なんです。」
と初春が答えた。

「ほお。んで、その二人は？」

「先程そのクレープ屋に並びましたので、そろそろ戻ってくるのでは？」

「ああ、来ましたよ。」

見てみると初春と同じ制服を着た黒髪の長い活発そうな少女と、白井と同じ制服を着た同じく活発そうな茶髪で肩くらいまでの長さの髪の少女がこちらに向かってきていた。

その御坂美琴とおぼしき人物を見て思わず神野は苦笑いした。嬉しそうな顔でカエルストラップを眺めている少女が、どう見ても今朝上条を追っかけていった生徒に見えたからだ。

そんなことは露知らず白井たちに二人の紹介をされ、続いて神野の紹介となった。

数分後、ベンチに座る初春と佐天の後ろに神野が立ち、納豆と生クリームのおトッピングというどう見てもゲテ物な感じのクレープを御坂に食べさせようとする白井とそれを防ごうとする御坂の格闘を眺めていた。

「へえ、じゃあ神野さんは初春が入る前から風紀委員^{ジャッジメント}の支部長だったんですか。」

「ああ、一応中3に上がると同時にな。」

「最年少支部長として風紀委員^{ジャッジメント}じゃ有名なんですよ。」

へえ、と佐天の羨望の眼差しに照れ臭くなった神野は目線をそらし通りを見て、

違和感に気づいた。

「どうしたんですか？」

「いや、どうしてあの銀行、昼間っから防犯シャッター降ろしてんのかなって思ったんだけど…」

そういった直後、防犯シャッターが内側から爆発した。

第1章 何気ない日常（後書き）

！
いかがでしたでしょうか。とりあえず平和な日常を書きたかった！

第2章 強盗、そして虚空爆破（前書き）

すいません。とある聖人の風紀委員と銘打ってるわりにしばらく魔術は出ません。最初はインなんとかさんの登場は4話位かな〜とか思ってたんですが下手したら6、7話くらいになりそうです。

第2章 強盗、そして虚空爆破

シャッターが爆発した。

公園で遊んでいた子供たちや、目の前のベンチに座っていた佐天などは一瞬何が起きたかわからないようだった。

しかし、神野、白井、初春の3人はすぐさま行動に移った。

「初春は警備員アンチスキルへの連絡と怪我人の有無の確認!! そのあと周囲の方の避難誘導を」

「わっ、分かりました!!」

「白井!! 行けど!!」

神野と白井は柵を飛び越え強盗犯のグループへと駆けていく。

どうやら御坂もあとに続こうとしたらしいが、白井に大人しくしてろと言われてしぶしぶ引き下がったようだ。

「ほら、さっさとしろよ!!」

強盗犯の1人が慌てた様子で残りの2人を急かす。
すると、目の前に

「風紀委員だジャッジメント（ですの）。器物破損、及び強盗罪の容疑で拘束する（します）。」

と、神野と白井が道路から躍り出てきた。

「嘘だろっ!! 何でこんな早く…」

強盗犯の1人の顔が強ばったが、よくよく見ればやって来た風紀委員^{ジャツジメ}は2人。しかも1人は中学生の女子だった。

逃走は余裕と踏んだのか、強盗犯から下卑た笑いがこぼれる。

「ぎやははは、なんだよこのガキども!!」

「風紀委員も人手不足か!？」

明らかに見下した言いぐさだった。

「ほら、さっさと退かないと、怪我するぜえ!？」

そんなことを言いつつ強盗犯の1人が白井につかみかかろうとする。

しかし、白井は余裕の態度を崩さずなんなくこれを避けると、

「そういう三下の台詞は、」

足技で男を転ばせ、太股に隠した金属矢^{ダーツ}で男を地面に縫い付けた。

「死亡フラグですわよ？」

「空間移動能力者!？」^{テレポーター}

縫い付けられた男の顔が驚きで染まる。

残りの2人を捕らえようとするが1人はどこかへ走り去っていく。

「白井!! 逃がすんじゃないぞ!!」

「分かってますの!!」

すぐさまその男を白井が追いかける。おそらく白井の能力をもってすれば捕まるのは時間の問題だろう。

彼女の能力は空間移動^{テレポート}。自分の体に触れている物体を瞬間移動させる能力だ。それは自分のからだとして例外ではない。つまり彼女に追われれば、座標さえわかればどこに逃げ込もうと無駄なのだ。

「さあつてと、あっちが捕まんのは時間の問題だし、あとはお前だけだ。」

そうやって神野は目の前の強盗犯に目を向けた。先程2人を急かしていたところと、もっとも頭がキレそうに見えるところから、こいつが主犯であると判断する。

「やっぱ簡単には行かねえか…。」

そうやって男は左手の平を空へ向けた。すると男の手の上に15cm程の火球が出てきた。おそらくこの男の能力だろう。

「発火能力者…。」
パイロキネシスト

思わず神野は呟いていた。しかし、直後、神野は嘲るようにハッと鼻で笑う。

「バカかお前は？ 何戦う前に手の内晒してんだよ？ そういうのはギリギリまで見せねえもんだろ？」

神野の挑発に苛立ったのか、男は声を荒げて

「お前ちよつとはビビったり警戒したりしろよ！！強能力者（レベル3）だぞ！？」
と言ってきた。

しかし神野は相変わらず意地の悪そうな笑いを浮かべながら、

「ああ、確かにそれなりだな。大方能力開発の途中で挫折してコレが限界だとか決めつけて拗ねてグレたクチだろ？」

「ヴっ!？」

どうやら凶星らしい。

神野はさらにニタニタ笑いながら

「おいおい凶星かよ!？もったいね。」

「っ!! 黙れ!!」

どうやら強盗犯はこちらの挑発にのってくれたようだ。

神野が嗜虐心に満ちた顔をしていると、男が手の上にあつた火球を放ってきた。

「まったく、危ねえだろうが!!」

口ではきつそうな声を出しておきながら横に跳んでしっかりと避けている。

「ホラよっ!!」

神野が掛け声を出し、左手を上から下へ下ろした。すると男の体が地面に急に倒れこんだ。

「っ!?! 何が!？」

「安心しろ。ちょっとお前の回りにかかっている重力を倍にしたただけだ。」

そう。これが神野の能力。「重力操作^{グラビティ}」。指定した範囲の重力を地球の重力と比較して5%〜500%まで変化させられる能力だ。能力のレベルは大能力者（レベル4）である。

「はあ、まったく手間かけさせんじゃねえっての。」

そう言いながら男に手錠をかけていると白井が裏通りの入り口から先程逃げた男をつれて出てきた。どうやらあちらも終わったらしい。遠くから警備員^{アンチスキル}の車輛のサイレンも聞こえてくる。こうして難なく

銀行強盗は解決した。

警備員への報告を済まし、公園の方を見てみると、白井が御坂に抱きついている。

「全く、あいつも懲りないねえ。」

苦笑いを浮かべながら、神野は自宅へと向かっていった。

その帰り道。神野は見知った顔を人混みのなかに見つけた。

「おーい、当麻ー！」

「？ああ、真か。どうしたんだこんな時間に？」

「仕事だよ、し・ご・と。な〜んか銀行強盗が出やがってよ。捕まえたはいいけどまた始末書出さなきゃな…。」

「相変わらず始末書書いてんのか。」
余計なお世話だ。

「まあな。そういうお前は？ああ、補習か。」

「おい、なんだその決めつけた言い方は。」

微妙にキレた上条を笑って受け流しつつ歩いていると、道沿いの植え込みから爆竹が爆ぜたような音が出て、わずかな煙が出ていた。

爆発音に驚いたらしい上条はビクツとして神野を見た。

「あ？誰か花火でも仕込んだのか？たく、たちの悪い…」

「いや…これは…。」

神野は何故か考え込むような仕草をすると、
「悪い。先帰っててくれ。用事ができた。」

そう上条に言い残し、その場を去っていった。

「誰かいるか？」

神野は風紀委員第177支部に来ていた。先程の爆発。花火などを仕込んでいたとしたらその燃えカスが残っているはずだが、それがなかった。つまり、先程の爆発は『何もないはずの空間が突然爆発した』ということになる。

実はこここのところ似たようなことが多発していたのだ。爆発事態は小規模で怪我人こそいないが、いつまでも同じ威力とは限らない。つまり、いつ怪我人が出てもおかしくないのだ。しかし、手がかりがないかと思われたこの爆発事件、1つだけ共通点があった。爆発の直前に『重力子』の異常加速が観測されていたのだ。風紀委員全体ではこの重力子の異常加速を爆発の予兆であると断定し、怪我人を出さないよう活動していた。

「支部長？どうかされたんですか？」

そう言って中から顔を出したのは固法美偉。

177支部に所属する強能力者（レベル3）の透視能力者である。

「さっきこの辺で重力子の異常加速、観測されなかったか？」

「え？ちょっと待ってください……ああ、確かに今から7分前に観測されてますね。爆発は小規模だったみたいですけど……」

その時、固法が見ていたパソコンに赤いアイコンが表示された。

「こ、これは……」

固法の顔が凍りつく。どうやら再び重力子の異常加速が観測されたようだ。

しかも、今回は今までとは文字通り桁が違う。

相当な規模の爆発になるだろう。

「っ！！早く現場に向かうぞ！！念のため『透明な盾』ポリカーボネード持ってけ！！」

「了解です！！」

「場所は！？」

「第七学区のコンビニです！！」

「急ぐぞ！！」

神野と固法は支部から飛び出していった。

第2章 強盗、そして虚空爆破（後書き）

いかがでしょうか？次は虚空爆破事件です！！

第3章 重力子（グラビトン）（前書き）

寒くなってきましたね。先日見事に風邪ひきました（笑）

第3章 重力子（グラビトン）

神野は自分の部下の固法と第七学区のコンビニに来ていた。もちろん、買い物に来たわけではない。

「ジャッジメント風紀委員です。この場から早急に避難してください！！」

固法の一言で店に一気に緊張感が漂う。

「固法！！俺が爆弾探すからお前は避難誘導を！！」

「了解です！！」

神野はさらに店のなかへと入り込み、爆弾を探す。本来であれば何一つ緊張することなどなく買い物をするはずの店内は、異様な雰囲気包まれていた。クーラーは効いているはずだが、神野の顔は汗でじっとり濡れていた。

「あの…うちの店で何か？」

「実はこの付近で重力子の爆発的な加速が……………」

どうやら、向こうで固法が店主に事情を説明しているらしい。しかし、爆弾はいつこちらに見つからない。

「クソ！！いったいどこに…」

苛立ち紛れに神野がそういうと、店の奥から短い悲鳴が聞こえてきた。見るとおさげの女子生徒が足を押さえている。どうやら転んだようだ。

「どうした！？」

「すみません。足を…」

とりあえず爆弾探しは保留して女子生徒の避難を手伝う神野。しかし、女子生徒に肩を貸した直後、彼は絶望的な光景を目の当たりにする。

棚のしたにこの場に似つかわしくないフアンシーなウサギのぬいぐるみが置いてある。そのぬいぐるみの前に直径数cm程の黒い丸ができたかと思うと、その黒い丸にぬいぐるみが吸い込まれていくのだ。メキメキメキ！と異常な音を立ててぬいぐるみが吸い込まれていく様はそのぬいぐるみ自体が異常な物であることを表しているかのようにだった。

「何！？これが…爆弾！？」

間に合わない判断した神野は女子生徒に覆い被さり、庇おうとした。

直後、ダイナマイトでも投げ込まれたかのような爆発がコンビニ内で起こった。

固法美偉は店長と自分を持っていた『透明な盾』ポリカーボネードで庇い、爆発をやり過ぎしていた。爆風が収まると店内を駆ける。奥を見るとおさげの女子生徒がへたへたと座り込んでいる。

「君！！大丈夫！？怪我は？」

すると女子生徒は怯えたような目をして必死に言葉を紡いだ。

「わ…私はこの人が庇ってくれた…から。で…でも……。」

固法は地面を見ると、そこにあったのは上司の神野が血塗れで倒れ

ている姿だった。

神野は目を覚ますとまず白い天井が目に入った。どこだ? と思い、首を巡らすと、大きな窓から青空がのぞいている。どうやら病室のようだ。

「おや? 目が覚めたようだね?」

声がした方に目をやると、カエルに似た顔つきをした医者が立っている。自分でもカエルに似ている自覚があるのか、名札にはカエルのマスコットのシールが貼ってあった。

「冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）…」

神野はこの医者を知っていた。

生きた人間ならどんな状態だろうと助け出すことをモットーに、こんな見た目ながら確かな腕を持っている。故についたあだ名が『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』と言うわけだ。

神野は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）に体調についてなど二三質問に答え、先程の虚空爆破事件について聞いた。

彼もあまり詳しくは知らないようだったが、現場の遺留品が少なく、手がかりになるようなものはないこと、学園都市の超能力者の情報を集めた書庫バンクに照合をかけた結果、重力子の異常加速グラビトンこれが出る能力の『量子変速シンクロトロン』、しかも爆弾にできるような、つまり大能力者（レベル4）以上の人物が1人、浮かんだらしいが、その能力者「くしろ かたびら鉤路帷子」は8日前から原因不明の昏睡状態に陥っており、犯行は不可能だろう、ということなどを聞いた。

つまるところ、捜査に進展が何も無いのだ。

「すみません。無理を承知で言ってるのはわかってます。ただ、ここでじっとしてるのは性に合わないんで。もう一度事件を一から見直したいんです。」

気がつけばそんな言葉が口からでてきた。冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）は、一瞬驚いたような顔をしたが、快く了承してくれた。

10分後神野は、病院内の携帯電話使用区域のベンチに座り、膝に置いたノートパソコンとにらめっこしている。その目は真剣そのものだ。

「遺留品は少なく、サイコメトラー読心能力者の読み取りも不可。書庫にもバンク該当する能力者はなし…か。」

正直、彼はかなり焦っていた。また自分のように爆発に巻き込まれる同僚が出てくるかもしれない。そう思うといってもたってもいられなかった。

（クソっ！！同僚が8人も傷ついてるのに打つ手なしかよ！！）

そう1人心のなかで毒づいた。しかし、彼はそこに何か引っ掛かるものを覚えた。

（8人！？いくらなんでも多すぎねえか？）

自分を含めれば9人もの風紀委員が傷付いたことになる。ジャッジメント過去に起きた虚空爆破事件は8件。グラビトンそれで負傷した風紀委員は自分を含めて9人。過去に起きた全ての事件で風紀委員が負傷している。偶然とは考えにくい。

(ま、さか…犯人の狙いは…)
いやな想像が神野の中で浮かぶ。

その時、神野の携帯が鳴った。電話に出ると支部にいる白井のようだった。

「どうした？」

グラビトン

『また、重力子の異常加速が観測されましたの。』

神野の肩がピクツと動いた。

「場所は!？」

『第七学区の洋服店、セブンスミストですの。ちょうど初春がそちらにいたようなので彼女に避難誘導を…』

一瞬、神野は自分の頭が真っ白になったのを感じた。はっとして、大慌てで白井に指示を出す。

「白井!! 初春に早く連絡を!! あいつが危ねえ!!」

白井はいきなりのもので事情が飲み込めないようだった。

『? どうしたんですの?』

グラビトン

「過去の虚空爆破事件8件全てで、俺を含めた風紀委員が計9人も負傷してる!! これはどう考えても偶然じゃねえ!!」

ジャッジメント

携帯越しに白井が息を飲むのがわかる。

『つまり、この事件は無差別に起きたのではなく、

ジャッジメント

観測値点周辺の風紀委員を狙ったの犯行、

今回の標的は初春ということですよ!？」

「おそろくな!! 早く連絡して初春にそこから避難するよう言って

くれ!!」

り、了解ですの、という一言と共に通話が切れる。神野は空を見上げ、自分の部下の無事を祈り、意を決して怪我をしたからだを引きずって現場へと急いでいく。

第3章 重力子（グラビトン）（後書き）

本来だったら3話目で虚空爆破事件については終わらせようとしたんですが、思ったよりも長くなってしまいました…。小説って難しい

第4章 虚空爆破（グラビトン）（前書き）

書いてたら止まらなくなって深夜まで書いてしまった…。相変わらず拙い文章ですが最後までお付き合いください

第4章 虚空爆破（グラビトン）

セブンスミスト。学園都市第七学区にある洋服店で、デザインの種類が多く、洋服はもちろん、その他の生活雑貨などを学生にも手が出しやすい低価格で提供しており、それなりの人気を誇る商業施設である。

本来であれば洋服を買う人々で賑わっていただろう。しかし、今は客どころか店の従業員すらいない。そんななかを御坂美琴は走っていた。

「よしっ、とりあえずこれで全員避難できたかな？」

そう。避難。ここで先程まで帰り道に会った初春、佐天と一緒に服を見て、何故かあのバカが小さな女の子を案内してるはトイレにいけばカエルのヘンテコなぬいぐるみを抱えたメガネの男はいるはで、正直疲れていたところ初春達と合流した直後に、白井から初春に電話がかかってきたのだ。

『初春っ！！今どこにいますの！？』

「しっ…白井さん！？」

『例の虚空爆破事件の続報ですの！衛生が重力子の爆発的加速を観測しましてよ』

「観測地点は！？」

『第七学区の洋服店、「セブンスミスト」ですの！』

電話をしていた初春はもちろん、聞き耳を立てていた御坂と佐天までもが驚愕していた。

「ラッキーです！！私、今ちょうどそこにいますっ！！」

「そうですね？なら話は早いですわ。速やかに一般の方の避難誘導

を！！！」

了解しました、と言って初春は通話を切り、避難誘導を開始した。
この避難誘導を御坂も手伝っていたのだ。

あれだけ人のいた店内はもはやその影をなくし、閉店直後のような
わずかな寂しさを感じさせた。

一通り残った人がいないか見て回っているとあのバカ…もとい上条
当麻がこちらに慌てながらやって来た。

「ビリビリっ！あの子は？」

「は？まだ避難してないの！？」

「あの子」というのは、先程上条が洋服店を案内していた女の子の
ことだろう。

「人が多くてよくわかんねえけど多分…。」

「ああもうっ！！とっとと探すわよ！！！」

その頃、初春もまた、残った人がいないか見て回っていた。すると、
再び白井から連絡が入った。

「もしもしっ！！もうなんで早く出ませんの！？」

どうやら何回も電話を掛けていたらしい。避難誘導に集中していた
せいで気づかなかったようだ。

「すみません。今、全員避難したか確認を…」

「今すぐそこを離れなさい！！！」

突然白井が大声でそんなことを言ってきた。訳がわからないでいる
と、白井から、

過去の8件全てで風紀委員が負傷していること、そのことからおそ
らく犯人の真の狙いが観測地点周辺の風紀委員だということ、そし
て今回はおそらく初春が標的となっていることを聞かされた。

初春は言葉を失った。そんな矢先、上条と御坂が探している少女がヘンテコなカエルのぬいぐるみを持ってきた。

「おねーちゃんメガネかけたおにーちゃんが
おねーちゃんにわたしてって」

上条は探していた女の子が見つかってホッとしていたようだが、御坂はその女の子が抱えているぬいぐるみに引っ掛かりを覚えた。

(?あれはさっきの:)

そう思った直後、

ぬいぐるみの前に直径数cm程の黒い丸ができたかと思うと、その丸にぬいぐるみがメキメキ音を立てて吸い込まれいった。

(なっ:もしかして、あれが爆弾!?)

どうやら初春もそれに気づいたらしく、ぬいぐるみを放り投げるとそれに背を向け女の子を庇う体勢をとった。

「逃げてください!!あれが爆弾です!!」

御坂は自身の通り名ともなっている『超電磁砲^{レールガン}』を放ち、爆弾ごと吹っ飛ばそうと考え、左のポケットから自身が『超電磁砲^{レールガン}』を打つときに好んで使うゲームセンターのコインを取り出そうとした。しかし、

極度の緊張状態にあったせい、取り出したコインが手から滑り落ちてしまった。

（ヤバッ…）

そう思ってももう遅い。爆弾は今にも爆発しそうにぬいぐるみの形を歪めていく。

（間に合わ——）

直後、爆弾が爆発した。

御坂は思わず目を瞑っていた。しかし、何故かくるはずの熱や爆風がいつこうにこない。

（何が——）

爆弾があつた方向を見ると、そこには——

場所は変わってセブンスミストの外。ジャッジメント風紀委員が張ったテープの前でたむろする野次馬達の少し後ろに、メガネをかけた御坂が見かけた少年。つまりこの虚空爆破事件グラビトンの犯人、「介旅 初矢」はいた。

「ククク…」

介旅は笑いながら路地裏へと入っていく。

（いいぞ！！今度こそ逝っただろう！！）

胸から沸き上がる喜びから、介旅は大声で叫ぶ。

「スゴイッ！スバラシイぞ僕の力！！徐々に強い力を使いこなせるようになってきたっ！！」

介旅はあまりの喜びから、後ろからある少年が近づいてきていることすら気付かない。

「もうすぐだ!!あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばっ……!!」

少年は、満身創痍な身体の力を振り絞って、目の前の調子こいてるクズに本気の蹴りを笑顔でいれてやった。

介旅は転がりながらビルの壁にぶつかって止まった。逆さまになった状態から呆然と自分を蹴った相手を見つめる。

そこには、全身に包帯を巻き、顔は笑顔だか言い様のないオーラを放っている神野がいた。

神野は無駄に高いテンションで介旅に話しかける。

「ヤッホー♪用件は分かってるよなあ、爆弾魔!!!!!!」

突然のことで介旅は焦り出した。

「なっ、なんのことだか僕にはサッパリ……」

神野はまだニタァという笑いを崩さない。

「ふうん? シラ切るんだ。まあいいけど。一応礼儀として自己紹介しとくな。風紀委員177支部支部長神野真だ。まああんたの能力、確かに威力は高いよなあ。でも残念。」

そこで一度神野は言葉を切り、

「死傷者どころか誰1人かすり傷すら負ってねえから(笑)」

信じられない一言を聞き、介旅は食いつく。

「バカな!?! 僕の最大出力だぞ!?!」

「ほう……」

口を滑らせた介旅に対し、神野はさらに邪悪に口の端を歪める。
介旅も自分の失言に気づいたらしく、取り繕うとする。

「い、いや外から見てもスゴイ爆発だったんで、中の人はとても助からないんじゃないかと…」

言いながら介旅は後ろ手で自分の鞆からアルミのスプーンを取り出そうとする。自分が能力をかければ爆弾となるスプーンを。

（勝ったっ！！）

介旅は勝利を確信し、スプーンを前へつき出す。しかし、つきだそうとした直後に上からなにかに押さえつけられるような感覚のせいで思わずスプーンを手放してしまった。それどころか自分の体重が何倍にもなったような感覚に襲われ、地面に張り付いた。

「がっ！？何が——」

言うまでもなく、神野が重力操作で介旅を押さえつけているのだ。
グラビティ

「さってと、まあ俺の怪我の分はこれくらいだとして、人の部下傷つけようとしたことの報いはきっちり受けてもらうからな！！」

後半からは神野のふざけたような口調が一変して凄味のあるドスのきいた声になった。

「ハッ今度は風紀委員の支部長様か」
ジャッジメント

「あア？」

介旅は悔しがるようなそぶりもなくニタニタ笑いながら告げる。直後、急に怒って叫び出した。

「いつもこうだ。何をやっても僕は地面に…ねじ伏せられる。殺してやるっ！！お前みたいのが悪いんだよ！！お前ら風紀委員とか…
ジャッジメント
力のあるヤツなんてのはみんなそうなんだろうが！！」

その言葉を聞いて、神野の中で何かがトんだ。

「歯ア食いしばれ！！！！」

神野は介旅にかかっている能力を解除すると介旅を立たせ、その顔を本気で殴った。

「！！何すん！！」

介旅はそこで言葉を切った。無表情の神野から、先程とは比べ物にならないほどのオーラを出していたからだ。

「なあ、こんな話知ってたか？まあ他人の話を持ち出すのは気が引けるが：常盤台の超能力者（レベル5）は元は単なる低能力者（レベル1）だった。それでもあいつは頑張って頑張ってひたすら頑張って：超能力者（レベル5）と呼ばれる力をつけた。他にもあるぜ？風紀委員177支部の現支部長は元はただの無能力者（レベル0）^{ジャッジメント}だった。それでもそいつは人を助けたいって一心で風紀委員になり、支部長にまでなった。」^{ジャッジメント}

でもな、と一言区切って、

「もし俺が無能力者（レベル0）のままだったとしても、風紀委員^{ジャッジメント}になってなくても俺はお前に立ち向かったと思うぞ。テメエのやったことは許せねえ。それ以上に能力にしかこだわられねえテメエの考え方が頭に来る。もう一度やり直したいと思うなら、しっかり罪を償ってこい！！」

その言葉を聞いた直後、介旅はヘタヘタと地面に座り込んだ。

白井黒子は爆発の現場を見ていた。後ろの風紀委員^{ジャッジメント}の同僚から容疑者と思われる少年を確保した、という報告にも生返事で返していた。彼女の頭のなかは疑問で一杯だった。初春達の話から、彼女たちを救ったのは御坂らしいのだが……

「どうやって能力を使ったら『初春達がいた場所だけ無傷』なんて状況を作れますの？」

御坂美琴は騒ぎの収まったセブンスミストの入り口にいた。ある少年を待ち伏せするためである。

（あのとき…）

御坂の頭によりがえるのは爆弾を吹っ飛ばすことに失敗し、瞑っていた目を開けた直後の光景。

（私の超電磁砲^{レベルガン}は間に合わなかった…。）

無能力者（レベル0）であるはずの少年の右手が爆発を打ち消している様子。

そんなことを考えていると例の少年が入り口へやって来た。御坂の顔を見るなり嫌そうな顔をしたが。

「お帰りかしら？」

「言っとくけど、今からお前の相手する気力はねえぞ？」

そんなことはどうでもいい。御坂はあえて皮肉っぽく告げた。

「いいの？ なんかみんなあの場を救ったのは私だって思ってるみたいけど？ 今名乗り出たらヒーローよ？」

しかし、上条はそんな御坂の皮肉も受け流し、

「？ 何言ってるんだ？ みんな無事だったんだからそれでなんの問題もねーじゃんか。誰が助けたかなんてどうでもいい事だろ」

御坂は呆気にとられてしばらくボーッとしていた。

神野真は、その日の内に退院させられた。実際そこまで傷はひどくなかったし、現場までいく元気があるなら心配ないとのことだめでたく退院となった。

「さてと…。」

まず寮に帰ったらすることがある。隣人にお礼を言わなくてはいいないのだ。

あの事件のあと、ことのあらましを御坂や初春から聞いていたところ、御坂が「ホントは私が助けたんじゃないのに……」だのなんだの言ってたので気になって聞いたところ、どうやら隣人のMr. 不幸こと上条当麻が本当の初春達の命の恩人らしい。

（まあ、あいつのことだから真顔で「誰が助けたかなんてどうでもいい事だろ？」とか言ってくんだろな）

心のなかで笑いながら神野は自宅へと帰っていった。

第4章 虚空爆破（グラビトン）（後書き）

これで虚空爆破事件は終了です。長かった！！ホントは1話で終わらすつもりが書きたいもんかいてるとどんどん長くなった！！

第5章 書庫（バンク）との食い違い（前書き）

どうしよう……。なんか科学サイドのこと書きすぎてどうやって主人公を魔術サイドに入れたらいいかわかんなくなってきた（泣）やっぱ小説って難しい↑これ書くの何回目だよ

第5章 書庫（バンク）との食い違い

「「うゝん」」

パソコンの前で数人の学生が頭を抱えていた。

「介旅初矢が異能力者（レベル2）ねえ…。」

頭を抱えていた数人の学生の1人、神野真がポツリと呟いた。ここは風紀委員の177支部。諸事情で入院していた神野が退院したのもつかの間、退院祝いなどをしてる暇もなく虚空爆破事件^{グラビトン}について大きな疑問が残ったのだ。

虚空爆破事件^{グラビトン}は、重力子の爆発的な加速が爆弾の爆発前に観測されたことから、『量子変速^{シンクロトロン}』の能力者が犯人であると断定し、昨日に入院しているはずの神野が犯人と思われる「介旅初矢」を捕まえたのだが、

「ええ、書庫^{バンク}の情報はそうなっています。」

パソコンを操作していた固法がそう答える。

ちなみに、本来であればこういった情報処理は同じく177支部に所属し、情報処理能力において右に出るものはいない（と神野は考えている）初春飾利の仕事なのだが、あいにく夏風邪を引いたらしく、今日は休んでいるのだ。

「だとしたらあの能力の威力が説明できねえぞ？」

そう。昨日虚空爆破の事件の容疑者として捕まえた介旅初矢。しかし、あれほどの爆発の威力から大能力者（レベル4）以上の人間の犯行である、という予測だったのだが、犯人の介旅初矢は異能力者（レベル2）だったのだ。

「介旅初矢が本当は犯人ではないという可能性は？」

一番現実的な予測を固法が述べたが、神野はすぐにこれを否定した。「いや、警備員アンチスキルに引き渡す前に軽い事情聴取はしたんだが、自供もしたし、犯行の手口の説明とかも風紀委員ジャッジメントの報告と一致してたからあいつが犯人なのは間違いないんだが…。」

書庫バンクの情報と実際の被害状況に食い違いが見られる。実はこのところそんなケースが多発していたのだ。

177支部の管轄内でもすでに2件。先日捕まえた発火能力者パイロキネシスト、神野は関わっていないが常盤台中学などの所謂お嬢様学校の集まる「学舎の園」で常盤台の生徒に恨みを持った少女が腹いせに常盤台の制服を着た人間の眉毛を片っ端から太く落書きした事件などか。

最初のうちは神野をはじめ、風紀委員全体でも、書庫バンクの情報に誤りがあるのではないかと考えられていたが先日システムスキャンの神野がそうだったように身体測定で学園都市全体の学生が日を分けてすでに能力測定を終わらせていたのだ。つまり、書庫バンクの情報には間違いないということだった。

もうひとつ可能性があった。短期間で急激に力をつけた能力者という可能性だ。しかし、

「まあ、いねえ訳じゃねえと思うがどう考えても稀だしな…」

確かに短期間で急激に力をつけた能力者はいないわけではない。しかし、ものすごく稀であることは確かだ。書庫バンクの情報と実際の被害状況に食い違いが見られるケースは学園都市内ですでに数件立て続けに起きている。つまり、可能性は極めて低かった。

「「うーん」」

再び全員で首を捻るが、そんなことで答えは出ない。

「うーん」

同時刻、白井黒子も首を捻っていた。下手をすれば頭から煙が出そうなほど考え込んでいる。

「大丈夫？成績落ちた？」

隣で御坂美琴がそんな白井の様子に軽く引いていたが、一応協力者だから：と思った白井の話を聞いて御坂も同じように考え込み始めた。

「あの犯人が異能力者（レベル2）！？どう見ても大能力者（レベル4）クラスの威力があったわよ！？」

「ええ、それは、つまり、……。」

しばらく黙り混むが、夏場の壮絶な蟬時雨が集中を乱す。

「ど、どういふことなのでしょう？」

「にっ、煮詰まってるならかき氷でも食べて頭冷やす？」

御坂が屋台のような見るからに季節限定です、という感じのかき氷店を指差す。

ちなみに、ここは冬場にはおでん屋になったりする。

「えっと、苺と…黒子は？」

「お姉さまと同じものを。それにしても、不思議なものですわね。気温自体は変わらないのに風鈴の音を聞くと涼しいように感じますの。」

御坂は、え？と一瞬キョトンとするとああ、と言って白井にレクチャーを開始する。

「共感性ってやつね。ひとつの刺激で複数の刺激を得る。例えば色を見たら普通は五感の内、視覚だけを感じる。でも赤系の色を見たら暖かく感じたり、青系の色を見たら冷たく感じたりするじゃない？」

「『暖色』『寒色』というものですわね。」

そ、と御坂は同意する。

「このかき氷もそうよね。イチゴの味に色のイメージをプラスする人間の脳って単純っつーか」

「ユーモアがわかるんですのよ」

そんな話をしていると不意に横合いから声がかかった。

「御坂さん、白井さん。昨日はお世話になりました。あつ、かき氷ですか？おいしそうですね。」

見ると佐天涙子が薬局の袋をもって立っていた。どうやら風邪で寝込んだ初春の薬を買ってきたようだ。

「私も買ってこよ♪」

そう言って佐天は先程のかき氷店へ向かっていった。

数分後、御坂、白井、佐天の3人は木陰のベンチに座っていた。

「初春さんの容態はどう？」

「熱は大したことないんですけど、あたしが買ってきたのも風邪薬じゃなくて熱冷ましで。むしろ一番欲しがっていたのは暇潰しの道

具かもつてくらいで。」

「まあ、一日中ベッドの上では…」

そう言つて横を向いた白井の顔が驚愕に染まる。

見ると御坂と佐天がかき氷を食べさせあいっこしていたのだ。平たく言えば間接キスである。

本人たちからしてみればただの食べ比べなため、なんの抵抗もないが、白井にしてみれば大問題である。

「なっ、なん、なにしてるんですのおおオッ!？」

「え? ただの食べ比べですけど」

そう食べ比べ。白井はなぜそれまでその発想がなかったのか、と悔やみながら愛しのお姉さまと間接キ…もとい食べ比べをしようとスプーンをさしですが

「いや、アンタ私と同じの注文したじゃない」

白井は絶望的そうな顔を見ると地面に何度も頭を打ち付け始めた。何を考えていたかは丸分かりなので、あえて御坂は聞かない。

そんな白井の状況にドン引きしつつ、佐天が昨日のことを話し出した。

「にしても、昨日の御坂さんすごかったですよね。初春たちも完全に無傷だったし」

いや、それは…と御坂が否定しようとしたが、佐天は話を続ける。

「あゝあ、『レベルアップ幻想御手』があればな。」

「『レベルアップ幻想御手』?」

「え? 御坂さん、知らないんですか? あくまで噂だし、詳しくは知らないんですけど、あたし達の能力のレベルアップレベルを簡単に引き上げられる道具、レベルアップ幻想御手ってのがあるらしいんですよ。まあ噂ですし、

都市伝説みたいなもんだと思うんですけど…」

御坂と、それまでずっと地面に頭を打ち付けていた白井の動きがピタリと止まる。考えていたことは同じだった。

もし、『幻想御手』^{レベルアップ}なんて代物が実在するなら一連の事件の辻褄が合うのでは？

「佐天さん！！」

「はっ、はい！！」

突然二人に呼ばれて佐天の肩がビクッと震えた。

「なにか他に知ってることはない？」

「え？ いや、でも噂だし、実体もよくわからないんです。学者が遺した論文とか料理のレシピとか、噂の中身もバラバラで…。あつ、でも、自称幻想御手^{レベルアップ}を使っただけでやつらがネットに書き込みしてるみたいですけど。ただ怪しい連中っていうか不良っぽいので信用できるか…」

御坂と白井は顔を見合わせる。白井は、しばらく考え込むような仕草をしたあと、

「信じられない話ではありますが…：そういったものが実在するなら一連の事柄に説明はつきます。一応当たってみる価値はあるかもしれないわね。」

そう言って支部に連絡した。

「ありがとね、佐天さん。」

そう言って二人は支部へと走っていった。

残された佐天はしばらく呆然としていた。

第5章 書庫（バンク）との食い違い（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想、要望、指摘、文句、批判、いつでも受け付けてます。要望も可能な限り取り入れていこうと思います。お願いします

第6章 幻想御手（レベルアップ）の情報聞き取り作戦（前書き）

この二三日で6話投稿してます。このペースで続けられたらいいんですが…。最近、暇さえあれば書いてます。

第6章 幻想御手（レベルアップ）の情報聞き取り作戦

7月19日。明日から夏休みの今日はあちこちにカップルや仲の良さそうなひとが集まっている。

そんな中、神野真はデートをするでも、仲良しな友達と遊ぶでもなく、ファミレスにいた。一応同じテーブルにツインテールの女の子が座っているが、別段彼女ではない。コーヒーを注文してはいたがほとんど手はつけていない。何故か。

「あ？^{レベルアップ}幻想御手の情報を教えてくれ？」

「うん！ネットで偶然お兄さん達の書き込みをみて、できたら私も……。」

斜め前を見るといかにも不良です、というオーラを出している集団と話している御坂美琴が目に入った。

これが神野の心配の種だった。

（つんとに、大丈夫なんだろうなー。）

話は数時間前に遡る。支部のパソコンの前でうんうん唸っていると部下の白井から電話がかかってきた。

『支部長！！確信はありませんが今回の一連の事柄に関係あると思われるものの情報を耳にしましたの！！』

「何？」

『あくまで噂ですが、能力のレベルを簡単に引き上げる「^{レベルアップ}幻想御手」なるものが存在しているらしいんですの。これがもし実在したとし

たら……。』

「書庫バンクの情報と食い違いが出ていてもおかしくない……。か。んで、その『幻想御手レベルアップバー』の詳細は？」

『申し訳ありません。何分噂ですので詳しくは……。しかし、ネットに自称「幻想御手」

（レベルアップバー）」を使ったという連中が書き込みしてるらしいんですの。不良の集団のようなので確信は持てませんが……』

「当たってみる価値はあるか……。わかった。その掲示板をちよっと調べてみる。」

そう言って通話を切り、調べてみると、確かにそれらしき書き込みを見つけた。数分後白井が御坂と共に到着した。

「おう、お前ら。どうやらビンゴだったみたいだぜ？」

そう言ってパソコンの前から退き、白井と御坂に画面を見せる白井と御坂が覗き込む。内容は要約すると

「幻想御手レベルアップバーのお陰で強い力が入ったからもうヘコヘコする必要はない」

という感じだろうか。しかもそいつらは自分の実名まで掲示板に掲載していた。ネット初心者であることが丸分かりである。

「一応、確認をとってみましたけど、確かに素行の悪いグループのメンバーばかりみたいですな。」

隣にいた固法も報告してくる。

「んじゃ、直接情報聞き出すとしますか。」

指をパキパキ鳴らしながら神野がニタツと笑う。しかし、すぐ横にいた御坂がこんなことを言ってきた。

「じゃあ私が行こうかしら？」

「「はい!？」」「」

神野、白井、固法まで絶叫していた。特に白井は慌てた様子で
「しっ、しかし、民間人のお姉様にそんなことをさせるわけには…」
「でもアンタたちは風紀委員だから面が割れてるかもしれないでし
よ？」

確かに一理あるが、白井の懸念はそんなところではない。

「で…でも途中で相手に腹をたてて能力を使ったり、なぎ倒しては
いけませんのよ？」

神野は心のなかで白井に全面的に同意した。この御坂という少女、
相当短気なのか、イラッときたら必ずビリビリしてしまうのだ（特
にどこかのツンツン頭の少年には）。

しかし、御坂はそんな神野達の心配などいざ知らず、

「わかってるわよく、それじゃまるで私が暴れん坊みたいじゃない」
実際暴れん坊だったと思うが。

「まあ、私に任せておきなさいって」

そんなこんなで冒頭の状態である。

（ふっ、不安だ！！なんか二重の意味で不安だ！！）

チラッ、と前をみると、白井もそんな感じのようだった。

「ねっ、いいでしょ？」

御坂が顔の前で両手を合わせている。

しかし、不良グループの1人は鬱陶しそうな目を見ると、

「ダメだダメだ。子供はねんねの時間だぜ？」
ガキ

瞬間、神野は御坂の肩がピクッと震えたのを見逃さなかった。

（おいおい、早くもご破算かあ!?!）

神野は相当焦ったが、

「えゝ、私そんな子供じゃないよゝ?」

なんか媚びに媚びた猫なで声でキャハッと笑っている御坂がいた。

なんとか計画は頓挫しなかったが、御坂の衝撃的な一面をみた白井が、神野に向かって飲んでいたクリームソーダを盛大に吹き出した。

「ばっ、何すんだよ!?!」

神野は不良グループに気づかれないように出来る限りの小声で白井に話しかけるが、先程のショックが大きすぎたようで劇画っぽい顔のまま固まっていた。

そんななかでも御坂と不良グループの会話は続く。

「だよなあ、オレはアンタ好みだぜ?」

しかもなんか不良の1人が御坂に言い寄っている。ホントにゝ、とかいいながらキャツキャツと笑っているのは本当に自分の知り合いなのか神野は疑いたくなった。

「じゃあ教えてくれる?」

（ていうかあの不良の左手にあるのってビールジョッキか!?!? なんか、顔赤いし!?!）

するとその左手にビールジョッキを持ったスキンヘッドのやつが鼻の下を伸ばしながら御坂の足をみている。なんだろう。あいつを無性に殴りてえ。

「んゝゝやっぱタダってわけにはいかねえなあ」

御坂は一瞬表情を固くしたがすぐさま愛想笑いモードへ切り替える。

「……えっとおお金なら少しは出せますゝ。」

どうでもいいがその変に間延びした話し方、どうにかなんねえか?

「金もいいけどこういう時はやっぱ…こっちの方かねえ？」
そう言いながらスキンヘッド（もうメンドイので以下ハゲ）が御坂の肩に手を回そうとする。

御坂はさりげなくそれを避け、苦笑いしながら

「え〜でもそういうのはやっぱ怖いっていうかあ…お金じゃダメ？」

可愛い子の仕草で頼み込んでいる（しかし彼女には本当に似合っていない）。しかしハゲは首を横にふった。

「ダメダメ。それじゃ教えらんねえなあ。子供じゃないんだろ？」
ニタニタしながら御坂の様子をうかがうハゲが本気でウザい。

直後、

「う…」

御坂が泣いているような仕草をしていた。どうやら顔にキラッと光るものがあつたため、神野としては、

（はあ、お嬢様ってのは演技もうまいんかねえ）

なんて思っていたが御坂の手に目薬があつたのを見てしまったためゲンナリした。

しかし、ハゲはそれを素直に涙と受け取ったらしく、オロオロしだした。

「私…実は無理言って学園都市に來させてもらったの」

「は？何を言ってる…」

ハゲが目に見えて動揺している。

「でもやっぱり私才能なくて、能力も全然伸びなくて
おい、待てそこの超能力者（レベル5）。

「お父さんはさりげなく電話で身体測定システムスキャンの結果聞いてくるし、お母さんはあなたはやればできる子なんだからって」

なんか妙にしんみりした雰囲気になっている。ハゲも似たような境遇なのか顔に縦線が入って見えた。

「期待に応えなきゃって思うけどどうしようもなくて、思わず嘘ついちゃって…。そんな時お兄さん達の事知って。もう幻想御手レベルアップしか頼れるものがなくなっって…」

なんだか思わず演技だと知っている神野ですら同情しそうになった。ハゲの方も「い、いやそんなこと言われても…」とか言っている。

「だから…」止めとばかりに御坂が涙目の上目遣いという男にとっては反則技以外の何者でもない悩殺オーバーキルな技を使って、

「ダメ…かな？」

と頼んでいた。なんかハゲの目がハートになった気がした。ちなみに白井は更なる追い打ちを受け、テーブルに頭をゴンゴンぶつけていた。

神野は啞然としながら目を御坂から反らすと、ハゲと一緒にのテーブルについていた2人がこそそなにかを話していることに気付いた。
（ヤベエ、バレたか!?!）

そう思った神野だったが、直後の

「こんなところで泣かれてもメンドクセー。金額次第で教えてやるよ」

という一言で不良どもが御坂の制服が常盤台ということに気づいて金ヅルにしようとしただけということに気付いた。ちなみにこの瞬間、御坂の目がギラッと光ったのは気のせいではないだろう。

しかしそこは常盤台のお嬢様。別にこんな連中にいくら払っても金に困ることはないし、いざとなれば能力でどうにかなるな、と考え財布から金を出そうとしたが、後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。

「これこれ童子ども。」

（（この声は…））

神野は見上げ、御坂は振り返ると――

「よってたかって女の子のサイフ狙うんじゃないやありません。」

そこに上条当麻がいた。

第6章 幻想御手（レベルアップ）の情報聞き取り作戦（後書き）

相変わらずの駄文。こんななお付き合いいただき、感謝感激です
！！

第7章 純白シスターと副作用（前書き）

前回と比べて少し遅れました。感想、要望、随時受付中です。

第7章 純白シスターと副作用

神野真は夜の町を走っていた。こう書くとランニングでもしてんのか？と思うかもしれない。しかし、神野はそんなのんきなことはない。

（あーもうっ！！どこ行きやがったんだよ！？）
1人ごちる。ついさっきまでファミレスで幻想御手レベルアップの情報を聞き出そうとしていた御坂の様子を見守っていたのだが：

（あのタイミングで当麻が出てくるとは…完全に予想外だった…。）
御坂が情報を聞き出そうとして財布から金を出そうとした直後、何故か同級生の上条当麻がやってきて、金をもらおうとしていた不良たちに

「これこれ童子ども」
なんて言いながら登場し、カツアゲを防ごうと試みたのだ。（実際には上条は御坂を助けたのではなく、彼女に関わろうとした不良の方を助けようとしたのだが、そんなことを神野が知る由もない）

（おかげで不良どもはキレルし、トイレに行ってたせいでホントは9人だったのに3人だと思ひ込ん
で相手しようとした当麻が不良全員引き付けてどっか行っちゃもうし。
だあーっもう！！当麻じゃねえけど不幸だーっ！！）

このままでは情報が完全にスカル。そう判断した神野は支払いを全て白井に任せ、（風紀委員の経費で落ちるよな？自腹とかごめんだぞコノヤロウ、と内心ビクビクな神野である）店を飛び出し、上条や不良達、そして何故かそちらへ不良（もしくは上条）を追っていた御坂の後に着いていこうとしたのだが：

（なんかもうその頃には誰も見えなかったんだよな…）

一応あちこち走り回って見たのだが、先程の不良達がなんか黒焦げになっているのしか見つけられず、（おそらく御坂の逆鱗に触れたと推定。その不良達の様があまりにも可愛そうだったため捕まえずにスルーした。）結局御坂も上条も見つけられなかったのだ。

（あゝあ、しゃゝねえ。帰るか）

もはや半ば諦めモードに入った神野は、白井に今日の捜査は終了という連絡をしてトボトボ学生寮へと帰っていった。

翌日。7月20日。今日から夏休みである。神野はうだるような暑さで目が覚めた。

（あれ？エアコン切ってたっけ？）

暑い。汗を異常なまでにかいている。飲み物を飲もうと冷蔵庫を開け、直後に後悔した。

冷蔵庫の中からなんとも形容しがたい刺激臭が漂ってきたのだ。

（うぷっ！？なんだこの臭い！？）

バタン！！と大急ぎで冷蔵庫の扉を閉める。どうやら、昨日の夜に停電が起こり、冷蔵庫の中身が全滅したらしい。

（ああもう。オレがなにをしたってんだよ…）

夏休み初日の朝っぱらからテンションが急勾配で降下中である。しかも朝早くから隣の部屋がうるさい。

（なに騒いでんだ？当麻のやつ）

元々のテンションもあり、イライラが一気に積もる。ちょっと文句言ってる、と思い、制服に着替えて外へ出ると、上条の部屋から

誰かが出てきた。

白い修道服に金糸の刺繍があしらわれた成金趣味のティーカップみたいな服を着た、銀髪碧眼のシスターさんだった。

(あれ？あいつ…)

上条の部屋をみるとドアのところに上条が呆然と立っていた。

「おい」

「ああ、真か…。」

「あの子誰だ？」

「俺にもよくわかんねえ。」

神野は分かった上で確認のために上条に質問する。

「あれってシスターだよな？」

「みたいだな」

おかしい。学園都市の性質上、教会なんてものは学園都市にはどこにもない。

「何でそんな人がいるんだよ？」

「今朝ベランダに引っ掛かった」

「？」

話が全く見えない。

「やっべー！！補習！！」

上条がなにかに気づいて慌てて出ていった。

上条が立ち去った後、神野は必死にさっきのシスターとどこで出会ったのか思い出そうとしたが、思い出すことはできなかった。

悩んでいた神野の携帯が着信音を鳴らした。それより今は仕事だな、と切り替え、電話に出る。

「はいはい。こちら神野。」

「支部長！！大変です！！」

電話の相手は初春だった。かなり焦っているようだ。

「どうした？」

「問題が発生しました！！介旅初矢が意識不明になったそうです！！」

「はあ！？」

アンチスキル

「居合わせた警備員の話だと、取り調べ中に突然眠ったように倒れ、第7学区の病院に搬送されたそうです。」

「分かった。すぐ行く。」

電話を切ると第7学区の病院へと急ぐ。

途中で白井と御坂に合流し、第7学区の病院へと入っていった。見ると、担当医らしい医者と1人の看護師がこちらを見ていた。

「到着が遅れて申し訳ありません。風紀委員177支部の神野です」
ジャッジメント

「同じく白井です」

「ご苦労様です」

「それで、容態は…」

医者は戸惑ったような顔をした後説明を始めた。

「最善を尽くしていますが依然意識を取り戻す様子は——」

「あの、先日こいつの頭を思いっきり殴ったんですけど…」

神野はおずおずと手を挙げながら言った。しかし、医者はかぶりを振って、

「いえ：頭部に損傷は見受けられません。それどころかどこも悪いところがないんです。ただ意識だけが失われていて：原因がわからず手の打ちようが…」

「このようなケースは稀なのでしょうか？」

白井が質問する。すると医者はさらに困ったような顔をして、
「稀少だった」と申し上げるべきでしょうか。つい先日までは私も
このような症例は診たことがありますでした。しかし、今週に入
って同じ症状の患者が次々と運ばれてくるようになりました。他の
学区の病院でも事態は同様です。この症状の患者が快復した例は今
のところありません」と説明した。

「伝染病とか？」

御坂が予測を述べるがこれも違うようだ。

「いえ、ウィルスは検出されていませんし、関係者の二次感染も起
きていないためその可能性は低いと考えています。」
ただ、と医者はそこで言葉を区切り、

「ただ、何か共通の要因が必ずあるはずですよ。」

(まさかこれも幻想御手が？)
レベルアップ

(今のところは情報不足で何とも…)

御坂と白井が小声で話している。

「だがもし仮にそうだとするなら事態はかなり深刻だな…」
神野も同意する。

医者はまだ話を続ける。

「情けない話ですが、当院の施設とスタッフの手に余る事案ですの
で、外部から大脳生理学の専門チームを招きました。間もなく到着
される頃かと…」

その時、後ろからハイヒールのカツツという足音が聞こえた。振り
返ってみるとその専門チームと思われる団体が到着した。真ん中に

立っている女性が気だるそうな声で挨拶してきた。

「お待たせしました。水穂機構病院院長から招聘を受けました、木^き山^{やま}春^{はる}生^{るみ}です。」

第7章 純白シスターと副作用（後書き）

やっと…！！ やっとインデックスが登場！！（ほんのチラリとでしたが）でも魔術側の話にシフトするのはもう少し先です笑

第8章 脱ぎ女との話し合い（前書き）

前回の分が遅れたので本日二回目の投稿です。正直疲れました…。

第8章 脱ぎ女との話し合い

病院の待合室は異様な熱気に包まれていた。白井黒子はその中で左手を内輪のようにおおぎながら、ある会議が終わるのを待っていた。

「暑い…」

チラリと横を見ると、愛しのお姉様こと御坂美琴がこの暑い中でスヤスヤ眠っている。さっきまで自分の上司である神野真も一緒だったのだが彼は席をはずしている。大方トイレか何かだろう。

足音がしたのでそちらの方を見てみると、先程の医者や外部の専門チームの人たちが出てきた。どうやら会議が終わったようだ。ちょうどその時に神野もトイレから出てきた。

白井は御坂を起こそうとするが一向に起きる気配がない。その時白井の目が御坂の唇に向けられた。

もしかして、色々できるチャンスでは？

そう考えた白井は目覚めのキスの名目で自分の欲求を満たそうとしたが、直前に御坂が目覚まし、白井のしようとしていることに気づくと彼女の頭を思いっきり殴った。

「普通に起こしなさいっての!!」

「起きなかったではありませんの」

すると、白井のしようとしていたことを見てしまったのか研究者の数人が白井達の方をみながらこそこそ話している。

「変な誤解受けるでしょうが」

御坂が赤い顔をしてそう告げるが白井は全く懲りた様子もなく、

「既成事実を周りから築き上げていくものですよ」

と言いはなった。もちろんその後には再び御坂の拳が降り下ろされたのは言うまでもない。

顔洗ってくる、と言って化粧室に御坂が行ったのを見送ると神野はあきれたように

「少しは自重しろよ…」

と白井に言っていた。

「君達が担当の風紀委員かな？」

ジャッジメント

不意に横合いから声がかかった。先程の木山という研究者だった。

「あっ、はい」

頭を押さえてうずくまる白井の代わりに神野が答える。

「待たせたね。一通りデータ収集は完了した」

「それで…昏睡状態の学生達は？」

ようやく復活した白井が尋ねる。

「私は医者じゃないから治すことは出来ない。こうなった原因を究明するのが仕事だからね」

それにしても…と木山はうんざりしたように待合室を眺めると

「暑いな、ここは」

たしかに暑い。クーラーがついていないらしくまるで蒸し風呂のような暑さだった。

「ここは真夏でもエアコンを入れない主義なのか？」

近くの看護師に木山が尋ねる。

「申し訳ありません、それが…昨晚の落雷で送電線が断線してしまっています。自家発電による最低限の電力供給はあるのですが、病棟

や機器を優先しているものですから」

「そうか、災害が原因では仕方ないな」

ちなみに昨晚の落雷は自然災害などではなく、今化粧室から戻ってきた御坂が原因であることは誰も知らない。

「全員揃ったところで改めて自己紹介しておこう」

御坂が来たのを見て木山が会話を切り出した。

「私は木山春生。大脳生理学を研究している。専攻はA I M拡散力場だ。よろしく」

A I M拡散力場。A n－I n v o u n t a r y－M o v e m e n tの略称で、能力者が無自覚のうちに発生させている微弱な力のフィールドのことだ。例えばここにいる御坂のような発電能力者なら体から常に微弱な磁場が発生したりしている、といったようなものだ。

ジャッジメント

「風紀委員177支部の神野真です」

「同じく白井黒子です」

「御坂美琴です」

3人が自己紹介し終わると木山が御坂に反応した。

「ミサカ：君が御坂美琴か」

「私の事ご存知ですか」

「ああ、超能力者（レベル5）ともなると有名人だからね」

そんな話をしていると先程の医者が木山に尋ねてきた。

「あの：それで何か分かったでしょうか？」

木山は首を振る。

「今のところは何とも言えません。こちらで採取したデータを持ち

帰って、研究所で精査するつもりです」

医者は申し訳なさそうに告げる。

「データならこちらから送ることもできましたのに。ご足労かけて申し訳ありません」

しかし木山はそんなことは一切気にしていなかったようで、

「いや、データだけではわからない生の情報というのもありますし、学生達の健康状態が気になりましたので」

そんななかに神野は木山の優しさを垣間見た気がした。

「あの、お尋ねしたいことがあるのですが、」

そう言って白井が本題を切り出した。

「レベルアップ幻想御手？」

「はい、ネット上で広まってる噂みたいなものなんですけど…」

一通りの説明を終えたあと、木山が質問してきた。

「それはどういったシステムなんだ？」

「すみません、何分噂なので情報が少なく、形状、使用方法ともに不明なんです」

「それでは何とも言えないな…」

「やっぱりそうですか…。でも実は植物状態の学生の中に…っ!!」
そこまで言って神野は言葉を切った。いや、目の前の光景があまりに衝撃的で次の言葉が出てこなかった。

何故か木山がYシャツを脱いで、上半身が下着だけの姿になっていたのだ。

神野は顔を一気に赤くするとそっぽを向いた。

「何をイキナリストリップしてますのっ!？」

白井が叫んでいる声が聞こえる。

「? いや、だって暑いだろう?」

暑いからって公衆の面前で服を脱ぐのに躊躇いがないのもどうかと思う。

「殿方の目がありますのっ!! 度を超した露出は慎んでください!!」

「私は特に気にしないのだが…」

「ジャッジメント風紀委員として風紀を乱す行為は許しませんっ!!」

白井の説教が続いていた。

ちなみにこの時、風紀を乱す行為は許さない、と言った白井に御坂がアンタが言うか…、と言っていたのは秘密である。

「下着をつけていてもダメなのか、知らなかった」

いや、おかしいだろ。

「続きは場所を変えて聞かせてもらおう。冷房の聞いた場所で」

数十分後、神野、御坂、白井、木山の四人は第7学区のファミレスに来ていた。

「さて、先程の話の続きだが、」

飲み物だけ注文したあと木山が話題を切り出した。

「同程度の露出でもなぜ水着はよくて下着はダメなのか——」

「「いや、そっちでなく」」

御坂と白井の声がハモリすぎていたのが逆に神野としては怖かった。一方木山はアレ?と首をかしげている。何だろう、この人に相談してホントに大丈夫か不安になってきた。

「あ——、話をまとめますと、」

改めて説明すること数分。

「つまり、ネット上で噂の幻想御手レベルアップなるものがあり、君たちはそれが昏睡した学生達に関係しているのではないかと、そう考えているわけだ」

神野達は肯定した。

「一応、支部長会議では学生に注意を呼び掛けるという案も出たのですが、まだ実在の確認もとれていない上、情報の開示によって逆に幻想御手の被害を拡大する恐れもあるので、現段階では公表を見送って実態を調査することになりました。」

木山はしばらく考え込むと

「……ふむ、君たちの仮定が正しいとするなら妥当な判断だろう。能力の強さ（レベル）が簡単に上がると言った効能や、使用者が植物状態になると言った情報が一人歩きした日にはまとまるものもまとまるまい」

で、とそこで一旦言葉を区切り、

「そんな話をなぜ私に？」

と聞いてきた。この質問には白井が答える。

「能力を向上させるということは脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われます。ですから――」

その先は木山が読み、言葉を続けた。

「幻想御手レベルアップが見つかれば、私にそれを調査してほしい、と」
はい、と白井は答える。

「構わんよ、むしろこちらから協力をお願いしたいくらいだ」

「ありがとうございます」

そう言って神野と白井は頭を下げた。

ところで、と木山は言いながら外を見た。

「さっきから気になっていたんだが、あの子達は知り合いかね」

神野達は窓際のテーブルに座っていたのだが、その窓の外を見ると窓にくっついていて佐天涙子とその少し後ろで会釈している初春がいた。

「へえ、脳の学者さんなんですか」

数分後初春たちと一緒にテーブルにつき、自己紹介をしていた。初春が白井に尋ねる。

「なぜそのような方とお茶を？ 白井さんの脳になにか問題が？」
地味に毒舌を放った初春に少しイラッとしながら白井が答える。

「レベルアップ幻想御手の件で相談してましたの」

「レベルアップ幻想御手ですか？」

ああ、と神野も答える。

「あ、それなら私……」

佐天がポケットからなにか取り出そうとしたが、直後の神野の台詞を聞いてその動きがピタッと止まった。

「レベルアップ実は幻想御手の所有者を搜索して保護することになると思う。」

何故です？、という初春の問いに神野が答える。

「まだ調査中だからはっきりとしたことは言えねえけど、使用者に副作用が出る可能性があること、あと急激に力をつけた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されてっからな」

は——…と分かったのか分かってないのかいまいちよくわからない
声を出したあと、初春が

「?どうかしめましたか佐天さん」と聞いた。

すると佐天は突然慌て出し、

「えっいや、別に…」

と言ってサッと手を引つ込め、その時に指先が当たったのかテーブルにあったアイスコーヒーがこぼれ、木山の足に思いっきりかかった。

「わーっ!!!す、すみません!」

少し焦った佐天だったが、木山はいや、気にしないでいい、と言ったあと立ち上がった。なんだか嫌な予感がする。

すると、予想通り木山はスカートを脱ぎ、ストッキングを脱ごうとした。

「だーかーらー!!!人前で脱いじゃダメだといってますでしょーが!!!」

白井が鬼の形相で食いついたが木山は全く気にしてなかった。

「お忙しい中ありがとうございます」

夕方、調査の依頼も終わったので木山と別れる。

「いや、以前教鞭を振るっていた頃を思い出して楽しかったよ」

「教師をなさっていたんですか」

なぜかそこで木山は意味深な笑いを浮かべると

「昔…ね」

と言って去っていった。

「んじゃあ、俺は一旦支部によってから帰るから。お疲れ様」

そう言って神野も御坂たちと別れた。

第8章 脱ぎ女との話し合い（後書き）

お待たせしました！！次はようやく魔術サイド、ステイルとの戦いです！！

第9章 魔術師（前書き）

新訳3巻買いました！！表紙、カラーページ、挿し絵の御坂が可愛すぎて生きてるのが辛いです笑

第9章 魔術師

「ふう、疲れた」

神野はそう言いながら学生寮へと帰っていった。御坂たちと別れたあと、支部に戻って資料の整理をして来たのだ。

（さってと、晩飯何にすっかな…）

なんて考えながら学生寮に入り、駐輪場の横を通りすぎようとして衝撃的な光景を目にした。

上条当麻が寮の非常階段から落ちてきたのだ。

「えっ！？何やってんだよ当麻！？」

すると上条は神野の顔を見ると急に

「真！！今学生寮に入るな！！あそこは危険だ！！」
と叫び出した。

「は？何言ってる…」

そう言って上条が落ちてきた階段の方を見て神野は絶句した。

炎でできた、巨人のようなものが覗いていたのだ。

「なんだ？アレ？」

すると、頭の中でパズルが組上がっていくような感覚を覚えた。今朝、学生寮の廊下で見かけた少女。今そこで覗いている炎の巨人。そして、自分のもう一つの名前を。そして、神野の頭から、スイッチを切り替えたようなカチツという音が聞こえた気がした。

「早く逃げろって！！じゃねえと…」

「当麻」

上条の言葉を神野が遮る。その落ち着きを感じさせる、むしろ冷酷

なような言い方は普段の彼の口調とはかけ離れていた。

「行くぞ」

「っ！？何言ってるんだよ！！早く逃げろって！！」

「当麻」

神野がもう一度上条の名を呼ぶ。

「二度は言わせるな」

「っ！！分かった…」

普段と違う神野の様子に戸惑った上条はしぶしぶ了承し、神野と上条は再び学生寮へと入っていく。

魔術師、ステイルⅡマグヌスは学生寮の廊下に立っていた。先程のツンツン頭の少年を逃がしてしまい、苛立っていたのだ。

「クソッ何なんだあの右手は！？」

あの右手。上条当麻の右手。彼の右手にはとある不思議な力が宿っている。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

それが異能の力であれば、触れるだけで打ち消せる力だ。

「くそっ『魔女狩りの王』イノケンティウスの再生能力がなかったら…」

魔女狩りの王とは、先程の炎の巨人である。

そんな時、非常階段から誰かがかけ上がってくる音が聞こえた。あの少年か？と思ったステイルだったが、すぐさま違うことに気がついた。足音が二人分聞こえてくるのだ。

「二人？こんな状況で誰が…『人払い』は刻んでいたはず…」

するとその二人が非常階段から躍り出てきた。一人は先程の少年か。しかし、もう一人は？その顔を見て、ステイルの表情が凍った。ステイルは、その男を知っている。そして、その男の名前を呼んだ。

「神野…真……………!?!」

上条は困惑していた。先程のステイルとかいった魔術師が、隣にいる同級生の顔を見るなり表情を固め、呆然とした状態で彼の名前を呼んだのだ。

「神野…真……………!?!」

横を見ると、神野がニタツと笑っている。普段から見ているような表情だが、何故か上条には目の前にいる少年が知らない人物のように思えた。神野が口を開いた。その口から出てきたのは信じがたい一言だった。

「久しぶりだな。ステイル」

上条は自分の耳を疑った。啞然として神野に尋ねる。

「久し…ぶり? 待、てよ真…お前……………こいつと知り合いなのか?」

「ああ、こう見えても魔術師だ。」

と神野は肯定した。

上条はますます訳がわからなくなってきた。学生寮が同じと言うことで仲良くしてきた少年が魔術師? しかも傷だらけの女の子を追いかける連中と知り合い?

「当麻。今は信じられないだろうが、訳はあとでちゃんと話す。俺は別に禁書目録インデックスの頭の中の魔道書なんて興味はない。今は俺を信じてください」

神野がそんなことを言ってきた。

未だに動揺していた上条だったが、はっと我に帰ると

「信じて……いいんだな？」

と神野に尋ねた。

もちろん、と神野はニタツと笑いながら返してきた。

その表情はいつも上条が見ているような表情だった。

神野真は心のなかで苦笑していた。

（たく、なんで今朝インデックスを見たときに思い出せなかったかなあ……。魔女狩りの王見てやつと思ひ出したぜ……。）

そう。神野真は魔術師である。諸々の事情があつて学園都市にいるのだが、まさかこんなところで魔術師と遭遇するとは。しかもこの魔術師は神野の知り合いだった。

（ぶっちゃけ、こんなところで魔術は使用したくないが状況が状況だしな……）

神野は心のなかで覚悟を決め、ふう……と深呼吸したあと、ある一つの名前を名乗った。神野真、ではなく、数年前に封印したはずの名、

魔法名を……

「Sagittis100（今そこにあるものを守る者）！！！！！」

ステイルはその魔法名を聞いて愕然とした。やはり、目の前の少年は自分の知り合いである神野真だった。

（無理だ……）

素直にステイルはそう感じた。この少年は自分とは比較にならない

ほどの実力を持っていた。そんな人間と対峙しているこの状況がおかしいのだ。

「くそっ!!」

ステイルは歯噛みすると右手から炎剣を作り出した。その摂氏は3000度に近い。その灼熱の炎剣を、躊躇なく目の前の少年に突きつけた。そのまま行けば、炎剣は少年の体を貫き、その体を溶かしていたはずだった。しかし――

いつの間にか少年が持っていた日本刀で炎剣が両断され、炎はそのまま空気に溶けていくように消えた。鏢もない、ただ木に刃をつけただけ、鞘も刃を納めることだけを考えている、といったような飾り気の一切ない日本刀の一振りで轟々と燃え盛る炎が掻き消された。

「くっ!!? 魔女狩りの王!!」
イノケンティウス

ステイルが呼び掛けると先程の炎の巨人が出てきた。ステイルがその巨人に命令するのは、

「殺せ!!」

一言の単純な命令だった。ただ、先程上条を標的にして命令したときよりも幾分か声がうわずっている。しかし、これもまた少年の持っていた日本刀で両断される。それどころか本来であればすぐに再生するはずの炎の体が一向に直らないのだ。

「魔女狩りの王!!? どうした!」
イノケンティウス

すると、目の前の少年が呟き始めた。

「どんなに強大な魔術でも、仕組みさえわかっていれば弱点を見つけるのは造作もない。まして知り合いの魔術ならなおさらだ。俺は今魔女狩りの王を切ると同時にルーンとして刻んであった紋章を破壊した。ただそれだけの話だ」

ルーン。この魔術師、ステイルは、ルーンと呼ばれるものを周囲に

刻み、その量がそのまま攻撃力に変換されるような術式を使う。つまり、ルーンを消されたら何もできなくなるのだ。

確かに、言葉にするのは簡単だろう。しかしステイルがこの学生寮に刻んだ（といってもコピー用紙に印刷したルーンをそこらじゅうに張り付けたただけだが）ルーンの数はいくらに1000枚を超えている。

「バカなッ！！どうやって…」

「水の術式を使ってこの階を除く全てのフロアを水浸しにした。まあコピー用紙に書いてあっただけだし、水がくればインクは溶けるんじゃないか？」

「なんッ!？」

ステイルは言葉を失った。

確かに、そうすれば、理論上出来ないこともないだろう。しかし、あれだけの物量だ。あまりに無茶苦茶過ぎる。しかし、目の前にいる神野という少年はそういった無茶苦茶を強引に成し遂げる男だった。

「さて、そっちの切り札は不発だったことだし、そろそろ終わりにすっか」

ステイルはギョッとして身を強ばらせた。すでに神野は彼が持つ刀を一度鞘に納め、居合いの体勢をとり、再び柄に手を伸ばしていた。そして一言、囁くように神野は言った。

「一ノ太刀『瞬間』」

そう言った直後、神野の姿がステイルの視界から消えた。
(っ!?!どこに!?!?)

その時、後ろから日本刀を鞘に納めたキン、という澄んだ音をステイルは聞いた。ステイルが気づいたときには神野はすでに彼の背後に立っていた。そして、ステイルは自身の身に何が起きたのかもわからないまま、地に伏していった。

「ふう…」

神野が緊張の糸が切れたかのようにため息をついた。そんな様子を上条はただただ呆然と眺めていた。

「真？」

上条が呼ぶ。そこにはいつもと変わらぬ神野の姿があった。

「死んで…ねえよな？」

「ん？ああ、一応峰打ちにしといたからな。多分気絶してるだけだろ」

上条はホッとした。もしこれでこの魔術師が死んでいたら神野が殺したことになる。そうなれば、さらに神野が遠い存在になってしまいうように思ったからだ。

「とりあえず、説明してもらおうぞ？」

上条は本題を切り出した。しかし、神野はその前に、と言うと背中を血で染めた純白のシスターを指差した。

「そっちの怪我をどうにかすのが先決じゃねえか？」

第9章 魔術師（後書き）

ちよつと後半は無理くりな展開になってしまいました…。今まで完全に科学サイドだった人間をどうやって魔術サイドにするか迷った末の苦肉の策です。次は頑張ります…

第10章 回復魔術（前書き）

そろそろ更新のペースを決めたいです。多分週一くらいになると思
います。

第10章 回復魔術

上条当麻はひどく動揺していた。

それはそうだ。自分の同級生が実は魔術師でした、なんて言われれば誰だって返答に困るだろう。

朝方に布団を干そうとしてベランダに出ると、白い修道服を着たシスターが「おなかへった」なんて言いながらベランダに引っ掛かっていたことからおかしかったのだ。

彼女は自分の名前をインデックス（上条に言わせれば偽名以外の何物でもない）と名乗り、魔術なんて得体の知れないものをまことしやかに語りだしたり、上条の右手、どんな異能の力も打ち消す『幻想殺し（イマジンブレイカー）』がインデックスの修道服に触れたら、何故かその修道服が脱げ、インデックスに噛みつかれたりしていた。

しかし、上条はこれらのインデックスの話をあまり真に受けていなかった。だからインデックスがフードを忘れていてもどうせ取りに帰ってくるだろう、と軽い気持ちで考えていた。

それが間違いだったのだ。

「何だよ…これ…」

上条が補習から帰ってきてまず目にしたのは、自身の背中を血で染めた純白のシスターの姿だった。

その直後、神父のような服装をしていながら、肩ほどまである真っ

赤な髪、くわえ煙草、右目の下に入ったバーコードのような刺青、タトゥーというおよそ神父に似つかわしくない男が現れ、インデックスを『回収』すると言った。

彼女の頭にはすべてを使えば世界を例外なくねじ曲げることのできる力を持つ、とされる魔道書なんてものを10万3000冊も『完全記憶能力』を使って頭に叩き込まれているらしい。

そして、生まれてはじめて本物の魔術なんてものを見て、『魔女狩りの王』イノケンティウスに追われてとっさに階段から飛び降りた。

そこに何故か神野真がいた。

しかも神野は非常階段にいる『魔女狩りの王』イノケンティウスを見るなり人が変わったかのように喋った。

「行くぞ」

たった一言の台詞が上条にはとてつもなく重く感じられた。

そして神野と共に再びステイルとかいった魔術師と対峙したわけだが、今回はステイルの焦りが目に見えるようだった。

そこで上条は驚くべき事実を知る。

神野真は実は魔術師だった、ということだ。

そして、上条が手を出すよりも前に、あっという間に決着はついてた。

「おい、どうした？確かにいきなりのこと過ぎて頭が着いていかねえかもしれないけど、今はこいつの怪我をどうにかすのが先決だろ？後でちゃんと説明はすっからとりあえず落ち着け」

気がつくとも神野が話しかけている。

「……………ああ、」

そのあとにも何か喋ろうとしたが言葉が見つからない。

今、上条たちは彼らの学生寮の近くの公園にいた。ステイルが起こした炎が火事のように認識され、野次馬が集まっていた。そんな連中に学園都市の住民ではないインデックスの姿を見られたらまずい、という神野の判断でここへ移動したのだ。

「チッ、出血がひどいな…。ジャツジメント風紀委員の応急キットでもどうしようもねえか…」

神野がインデックスに応急手当をしようとしていたが、出血がひどすぎてどうにもならないらしい。

「大、丈夫だよ？とりあえず、血を止めることができれば…」
インデックスが弱々しい声でそう言う。

上条は彼女の肩をつかみ、聞いてみた。

「なあ、お前の頭の中の魔道書に傷を治すような魔術はないのか？」
インデックスは相変わらず弱々しい声で答える。

「あるには、ある…けど、例え正しい順序を踏んで術式を組み上げても、君の右手が、きつと、邪魔をする」

上条は悔しさで一杯になった。

「くそっ、またかよ！！またこの右手が悪いのかよ！！」

上条の右手には『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が宿っている。

それが異能の力であれば、その善悪を問わず、問答無用で打ち消す。それが、誰かの命を救うための治療であつても。

「それだけじゃなくてね、」

インデックスが続けた。

「君たち超能力者には魔術は使えないの。魔術ってものは元々、才能のない人のために産み出されたものだから、才能のある君たちが使えばきつと体のどこかが拒否反応を起こす。だから、超能力者には魔術は使えないんだよ。」

上条は絶望した。目の前に少女を救う方法があるのに、それを使うことのできない歯痒さで身を裂かれるような思いがした。しかし――

「待てよ、あきらめんのは早計ってもんだぜ？」

神野が後ろでニタツと笑っていた。上条がキョトンとしてみると、あきれたように神野は言った。

「おいおい、もう忘れたか？俺はさっき魔術を使った。だが見てみる？俺はどこも怪我してねえぜ？」

見ると確かに神野の体には傷ひとつない。内出血を起こしているような様子も皆無だ。

「なん、で？」

インデックスが聞いた。

「おれ自身もよくわかつちやいないんだが、なんつうか、特殊体質つてやつか？超能力開発を受けてはいるが、この通り、魔術を使つても体のどこにも負荷はかからない」

神野自身、その事についてはよくわかつていない。わかっているの

は、自分は超能力者のくせに魔術を使える、ということだけだ。

「つーわけで魔術使っても大丈夫だが：まあ、こんなところで魔術使うわけにもいかねえし、移動すつか」

そう言って神野がインデックスをおぶった。

「どこにだよ？」

上条が尋ねる。学園都市は外部からの侵入者はあまり快く思わない。だからこそ、常に町の中で警備員アンチスキルやら風紀委員ジャッジメントが目を光らせ、上空からは絶えず人工衛星による監視がなされている。インデックスがここまで来れたのが奇跡のような状態なのだ。いくら怪我人とはいえ、外部の人間を受け入れてくれる場所など少ないだろう。

そんな上条の疑問を神野はさらっと一言で片付けた。

「風紀委員ジャッジメントの仮眠室だ。一応全部個室だし、うちの支部はほとんど誰も使わない。見つかる可能性は低いし、仮眠室だから防音設備も整ってる。セキュリティもそれぞれが持つてる鍵だけだ。だから鍵さえ持っていれば誰でも入れる」

確かにこれ以上の好条件は他にないかもしれない。そう考えた上条は神野と共に風紀委員ジャッジメント177支部へと向かった。

その仮眠室、と呼ばれる空間に入って、上条は絶句した。ここは本当にただの仮眠室なのか？そんな風に思うほどだった。

広さは上条の学生寮の部屋を一回り小さくした程度。仮眠室にはもったいないほどの広さだ。しかもキッチンやシャワー室まで完備してある。正直そこらの学生寮と遜色ないほどの設備だった。

「かつ、金の無駄な気がする…」

思わず上条は呟いた。しかし、神野は苦笑いしながら答える。

「そうは言ってもなあ、ここで使った光熱費とか、この部屋の維持費とか、勝手に奨学金から減らされるんだぜ？参っちゃうよ…」

そんなことよりも今はインデックスの治療が優先だ。神野は背負っていたインデックスをベッドの上に寝かせ、回復魔術への影響がある、と言って上条にしばらく出ていってもらった。（ここで単刀直入に邪魔だ、と言わないところが神野の優しさだったりする。）

準備を整えると神野は作業を開始した。

「現在時刻は、日本標準時刻で7月20日午後8時30分。だったら：巨蟹宮^{カニビ}かな…」

神野は余裕綽々といったような感じで鼻唄まで歌いながらパツパと図形のようなもの：魔方陣をテーブルの上に描いた。

そして神野は一旦目を閉じ、再び目を開けると別人のような雰囲気^{ウインディーネ}が漂った。

「巨蟹宮^{カニビ}の終わり、八時から十二時の夜半。方位は西方。水属性^{ウインディーネ}の守護、天使の役はヘルワーム…」

そして神野はその描き終えた魔方陣の中に様々なものを置いていく。一見乱雑に見えるその物の置き方はよく見るとこの部屋の物の全てのものと同じようにおいてあった。

「さてと…」

そう言って目を閉じ、両手を胸の前で組んで、祈るような姿勢をとると、歌うように何かの『音』を発した。すると、テーブルの上のこの部屋のミニチュアにおける神野の位置に置かれたファンシーなカエルの置物からも似たような音が発せられた。そして神野がテーブルを、その角を叩いて揺らすと、同じように部屋も揺れた。

「リンクしたか…」

そう言って深くため息をついて目を閉じ、頭のなかに天使を思い浮かべた。すると、

テーブルの上、少し浮いたところに純白の羽を持つ美しい天使のようなものが現れた。

「……カタチの固定化に成功。これより神殿へと降ろした天使による生命力マナの補充に移る」

再び目を閉じ、手を胸の前で組んで『音』を出す神野。

直後、ミニチュアにおけるインデックスの位置に置かれたこれまたファンシーな羊のキーホルダーの背中が溶け、ドロツと流れ出したかと思うと、まるでビデオの逆再生のように溶けたぶんの合成樹脂プラスチックが元へと戻っていき、最終的にキーホルダーは完全な無傷へとまた戻った。

「生命力マナの補充を確認。神殿の天使を空へ帰し、終了とする。」

そして部屋を包んでいた不思議な光が消え、部屋は再び静かになった。神野はすぐに外にいた上条を中に呼び寄せた。

部屋に入って上条が真っ先に見たのは、背中マナの傷が塞がり、スヤスヤと気持ち良さそうに寝ているインデックスの姿だった。

第10章 回復魔術（後書き）

新約3巻面白いですね。もう4、5回は読んだ気が…（笑）

第11章 L e t ' s 説明会!! (前書き)

週一とこの前言ったのに…。やっぱり更新は不定期です。すみませ
ん m (m

第11章 L e t ' s 説明会!!

とりあえず、インデックスの怪我を治すことには成功。そんなわけで、ようやく神野の説明タイムのスタートである。

「さて、と…どっから話す？」

正直尋ねたいことは山ほどあるが、まず確認したいことから上条は聞いた。

「お前、本当に魔術師なのか？」

「ああ」

言うまでもない、と言わんばかりの即答だった。

「正確にはイギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師だ。一応インデックスもその所属だな。」

「そーいやあ英国式がどうのとか言ってたな」

「魔法名はさっきも名乗った通り『S a g i t t i s 1 0 0』。『今そこにあるものを守る者』っていう意味だ」

「なんか無駄にかっこいいな」

「無駄とか言うなよ…」

少し神野は項垂れた。

「じゃあなんで学園都市に魔術師なんてもんがいるんだ？ここってオカルト魔術から一番縁遠いところだろ？」

再び上条が尋ねる。

「だからこそ、ってところかな。今のところ世界は、科学と魔術、オカルト半々のバランスで保たれている。別に魔術から一番縁遠い場所だからって魔術師がいけない訳じゃあない。むしろ敵の実状を探るための

スパイだっているかもしれない」

「じゃあ、お前もスパイなのか？」

神野は首を振った。

「いや、そんなメンドイ役職につく気は毛頭ないよ」

「じゃあ何で？」

「うーん：あんまり人に聞かせるような話じゃないんだが：実は俺がまだガキの頃、自宅に押し入った強盗に家族を殺されてな…。驚いたぜ？家に帰ったら家族全員血まみれだったんだから。慌てて救急車呼んでも手遅れだった。それにまだかろうじて息があった妹が俺のことを呼びながら腕の中で冷たくなったりしてな…」

神野は目を伏せながら語った。

「孤児になって、しばらくロンドンの路頭をさまざまとしてたところを清教の神父に拾われた。だから俺は魔術師になることを決めた。そして、俺みたいな人間を二度と出さないように、せめて目の前のものだけは何がなんでも守り通す。そう決意したからこの魔法名を名乗ってる」

「ただ、いつまでも教会の世話になるわけにはいかなかった。だから学園都市に行くことも決めた。確か、小1の頃だったかな…」

「もしかして、風紀委員になったのも？」

ああ、と神野はわずかに頷いた。

「この街に来て、風紀委員ジャッジメントってものの存在を知った。『もしかしたら、風紀委員ジャッジメントになれば誰かを救えるかもしれない…』そう思ったから風紀委員ジャッジメントにも入った」

「今まで誰にも魔術師だと言ってこなかったのは？」

「第1に誰にも信じてもらえないと思ったから。第2に超能力者に

なったせいで魔術が使えなくなると思ってた、もう魔術を使わないと決めたから、かな？」

「魔術を使っても体に拒否反応が起きないことについては？」

「正直、俺にもよくわかつちやいねえ。中二の時だったかな？連続通り魔事件を追って、路地裏で小学生が刺されてな。目の前の虫の息だったその子が殺された妹に重なって……。死んでもこの子は助ける、って思ってたから魔術を使った」

ところが、そこまで言って言葉を区切り、テーブルに置いてあった麦茶を一口飲んだ。代わりに上条が続ける。

「魔術を使ってもからだはどこも傷つかなかった……」
そ、と素っ気なく神野が答えた。

「そのあと、おっかなびっくり他のやつも試したんだが、どれも平気だった。理由はわからん」

他には？、と神野が聞いてきたので、再び質問をする。

「禁書目録って何なんだ？」

「Index—Librorum—Prohibitiorum。法の書とか、ソロモンの小さな鍵とか、死霊術書とかその他もろもろの魔道書を集めた、所謂『魔道書図書館』。この子の『完全記憶能力』を使って10万3000冊の魔道書を記憶させた。常人だったら一冊目を通しただけで廃人になんだろうな」

「なんでそんなもんを記憶させたんだ？」

上条の口調にはわずかに怒りが灯っていた。

話せば長くなるけど……と前置きして神野は続ける。

「そもそも、十字教ってのは元はひとつだが、いまとなつちやあ旧カトリックプロテスタント教、新教、ローマ、ロシア、イギリス、あと大小様々な魔術結社、

てな具合に大量に枝分かれしちゃった。何でか分かるか？」

「そりゃあ…」

いくら赤点少年上条でも、教科書を流し見た程度でもわかる。ただ、『本物』であるインデックスや神野の前で言うことに気が引けた。そんな上条の様子を悟ったのか、神野は苦笑しながら、

「別に遠慮することなんてないんだけどな。分かっていると思うけど、当然、宗教に政治を混ぜたからだ。思想の違いによって分裂、対立して争った。同じ神様を信じてるくせに敵同士になった。俺たちは同じ神様を信じつつも別々の道を進むことになっちゃった」

「互いの交流を無くした俺たちは、それぞれが独自の進化をしていて『個性』を手に入れた。国の様子とか風土とか、そんなことで各々の事情に対応して変化した」

少し呆れたように息を吐いて、

「ローマ正教は十字教内最大宗派になって『世界の管理、運営』を、ロシア成教は『非現実オカルトの検閲、削除』を。それで、俺たちイギリス清教は…」

そこで神野はわずかに言葉に詰まった。そこになにか思い出したいものでもあるかのように。

「イギリスは魔術の国だからな：イギリス清教は魔女狩りとか異端狩り、宗教裁判——そんな感じの『対魔術師』用の文化・技術が異常なほどに発展した」

「実際、ロンドンには今も魔術結社を名乗る『株式会社』がいくらかもあるし、書類上だけの所謂幽霊会社ならその十倍近くある。元々は『街に潜む悪い魔術師』から市民を守るために行ってたはずの

試行錯誤が、いつからか極めすぎて『拷問・虐殺・処刑』にまで発展しちゃった」

神野は自嘲的な笑みを浮かべる。その笑顔は上条が見ている彼とは別人のようだった。

「イギリス清教には、特殊な部署があるんだ。魔術を調べ対抗策を練る。それが俺達が所属する『必要悪の教会』^{ネセサリーウス}。敵を知らなければ敵の攻撃を防ぐことなんてできねえ。だが、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れれば体が汚れる。だからその『汚れ』を一手に引き受ける部署を作る必要があった。だから必要悪の教会なんつうもんが出来ちゃった。それでその汚れの最たるもんが……」

「10万3000冊……」

ああ、と神野は頷いた。

「魔術ってのは式みてえなもんだからな。上手いこと逆算すりゃあ、敵の『攻撃』を中和させることができる。だからこいつは10万3000冊を……」

「叩き込まれた……って訳か」

今度の上条の口調には明確な怒りがあった。

「ああ、世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだからな」

「でも、魔道書なんてヤバイモン、場所が分かってんなら読まずに燃やしちまえば良いじゃねえか。魔道書を読んで学ぶヤツがいる限り、魔術師は無限に増えるんだろ？」

「まあな、だけど重要なのは『本』じゃねえ。『中身』だ。本自体を消しても中身を知ってるヤツが弟子に伝えちゃったらなんの意味

もねえだろ？まあ、そういうやつは魔術師じゃなくて正確には魔導師ってんだけどな」

要するにネットのデータみたいなものか、と上条は大雑把に考えた。元を消してもコピーに次ぐコピーで永遠にデータは存在する。

「それに魔道書はあくまで教科書^{テキスト}。そいつを読んだだけじゃ魔術師とは言えねえ。そこに自分なりのアレンジを加えて、オリジナルの魔術を作ってこそその魔術師だからな」

神野は苦しそうに

「それだけじゃねえ。さっきも言ったが魔道書は危ねえんだ。人の精神じゃ封印すんで手一杯だな」

「でも、魔術ってのは超能力者^{おれたち}以外の普通の人には使えるんだろ？ だったらもつと世界中に広まってるもんじゃねえのか？」

「まあ、それは大丈夫だ。結社のやつらも不用意に魔道書は外には出さねえ」

「？なんでだ？連中にしたって仲間が大いに越したことはねえだろ？」

「だからこそ、さ。兵器持ってる人間が全員仲良しこよしやってたら戦争なんて起きるわけねえだろ？」

「ふうん、大体分かった。つまりあれだ。連中はこいつの頭にある爆弾を手にいれてえってわけだな」

「まあ、な。10万3000冊は全て使えば世界を例外なくねじ曲げることができる。俺たちはそれを魔神って呼んでる。魔界の神、じゃなくて魔神を極めすぎて神の領域まで足を突っ込んだヤローって意味でな」

ふざけやがって――、確かに上条はそう言った。神野にも少しは上条の気持ちができる気がした。インデックスは好きで魔道書な

んて記憶したわけではない。少しでも魔術による犠牲者を減らすために記憶することを受け入れたはずだ。なのに教会はそんなインデックスのことを『汚れ』と呼ぶ。そして何より、そんな人間ばかり見てきたはずなのにそれでも他人のことばかり考えている少女が気に食わないのだろう。

「……、ごめんね」

いつの間にか起きていたのか、途中から神野達の会話を聞いていたらしく、インデックスがそんなことを言った。自分は悪いはずなんじゃないのに。それでも人に迷惑をかけてしまったと思い込み、それを悔やんで。

「……ざっけんなよテメエ。そんな大事な話、なんで今まで黙ってやがった」

そう言って上条はインデックスのおでこをパカン、と叩いた。

上条は何に対してイライラしているのか、自分でも分かっていなかった。ただ、インデックスの一言で上条はキレた。慌てたように神野が上条を止めに入るが、上条にはそんな神野の声は届かなかった。

犬歯を剥き出しにして病人を睨む上条に、インデックスは両目を見開いてなにかとてつもない失敗をしたかのような顔をした。

「だって。信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、その、……あの、」

ほとんど泣きそうなインデックスの声はどんどん小さくなり、最後の方はほとんど聞こえなかった。

それでも、きらわれたくなかったから、という一言を上条は聞いてしまった。

第11章 L e t ' s 説明会!! (後書き)

感想、随時受付中です!! お願いします!!

第12章 たったそれだけなんだろう？（前書き）

やっぱりペースを決めたい……。4日に一回かな？

第12章 たったそれだけなんだろう？

「きらわれたくなかったから」

そんなインデックスの一言を聞いた瞬間、神野は確かに上条の頭からブチン、という音を聞いた。

「ふ、ざけんなよ。ざっけんなよテメエ!!」

上条の怒号はそれが向けられているわけでもない神野ですら萎縮するほどの迫力だった。

「ナメた事言いやがって、人を勝手に値踏みしてんじゃねえ！教会の秘密？10万3000冊の魔道書？とんでもねえ話だったし、聞いた今でも信じらんねえような荒唐無稽なお話だよ」

だけどな、と上条はそこで一拍置いて、急に口調を変えるとまるで優しく語りかけるように

「たった、それだけなんだろう？」

インデックスの両目が見開かれた。

その小さな唇は何かを必死に咬こうと必死に動くが、言葉は何も出てこない。その後ろでは神野が呆れたようにやれやれ、といったポーズを取っていた。

「見くびってんじゃねえ、たかだか10万3000冊覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってんのか」

上条はばつが悪そうにインデックスから目を逸らした。

その時、上条はようやく自分が何に対してイラついていたのか理解した。上条は単にインデックスの役に立ちたかった。なのにこの少女は一度も上条に『助けてくれ』とは言わなかったのだ。それがただただ悔しかった。

「……ちったあ俺を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじゃねえぞ」

インデックスは呆けたように上条の顔を見上げていたが、

ふえ、と。いきなり目元に涙が浮かんだ。

その涙は、今この瞬間の言葉に対するものだけではないはずだ。今まで抱え込んできた何かが上条の言葉を引き金に溢れ出たのだろう。だが、やはり女の子に目の前で泣かれるのは正直辛い。というより、ものすごく気まずい。

神野に目線でSOSを送るが、神野は「泣かした」という視線を送るばかり。

上条は必死に取り繕う。

「あ、あーっ、あれだ。ほら、俺ってば右手があるから魔術師なんざ敵じゃねえし！」

「……、けど、ひっく。夏休みの、補習があるって言ってた」

「……言ったっけ？」

「絶対言った」

上条は再び神野にSOSを送るが、今度は神野から返される「お前、やらかしたな」という視線が超痛い。

「い、いいんだよ。補習なんて。別にサボれば補習の補習が待って

るだけだ」

「小萌先生聞いたらマジで怒るだろうな」
そんな神野の言葉は当然のようにスルー。

インデックスは目に涙をためたまま上条にまた尋ねる。

「じゃあ、なんで早く補習に行かなきゃとか言ってたの？」

「……………、あー」

あの時は彼女の修道服が上条の右手『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が壊したせいで彼女を素っ裸にした直後で、気まづさがMAXだったわけで……………。

「……………私がいると……………居心地悪かったんだ」

「……………（汗）」

「悪かったんだ」

ごべんばび（ゴメンナサイ）っ！と上条が魂の土下座モードに移行。

インデックスはちらりと神野を見た。神野はその意図を察し、満面の笑みで答える。

「インデックス。別にやってもいいぞ？つか遠慮はいらねえ。思う存分やってしまいなさい」

神野からの許可が降りた直後、うんっ、と最高の笑顔を神野に向けてから、インデックスが獣のようなギラギラした目で上条の頭頂部に向かって突撃した。

そこから500m程離れたビルの屋上でステイルは双眼鏡から目を離した。

インデックス
「禁書目録に同伴していた少年の身元と、神野真らしき人物について探ってきました。……………禁書目録は？」
かのじよ

スタイルは後ろに立つ女の方を振り返りもせずに答える。

「生きてるよ。どうやら神野真が魔術を使ったようだ」

女は無言だったが、わずかに安堵しているように見えた。

腰まである髪をポニーテールにまとめ、腰には『令刀』と呼ばれる長さ2 m以上の刀が鞘に納まっている。

格好は白いTシャツにジーンズという、これだけならば普通の格好だが彼女の服装を見て普通だという人間は少ないだろう。

白いTシャツは余った裾を脇腹の辺りで縛ってヘソまで丸出しだし、ジーンズの方に至っては左の足の部分を根本からスッパリ切っている。脚には膝まであるウェスタンブーツ、日本刀も拳銃のようにホルスターに挟むようにぶら下げてあった。

「それで、神裂。アレは一体なんだ？」

「それですが、神野真については我々の知る彼で間違いないようなのですが、超能力開発を受けているにも関わらずあなたとの戦闘、かのじよ禁書目録の回復魔術、と魔術を使っています。拒絶反応の跡もあります。原因は不明です。あと、」

そこまで言って女は言葉に詰まった。

「もう一人の少年については情報は特に集まっていません。少なくとも魔術師や異能者の類いではない、ということでしょうか」われわれ

「何だ、もしかしてアレがただの高校生だとも言うつもりかい？
止めてくれよ。なんの力も持たない素人が裁きの炎を退けられるほど世界は優しくはない」イノケンティウス

「そうですね。……むしろ問題なのは、あの少年が『ただのケンカっ早いダメ学生』というカテゴリになっていることです」

「情報の意図的な封鎖…かな。しかも神野真のような人間までこちらにいるとは」

「敵の戦力は未知数。対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」

実際はこれはただの勘違いだ。上条の右手『幻想殺し（イマジンプレイカー）』は相対的な能力であり、あくまで打ち消す力しかない。つまり学園都市の身体検査システムスキャンに使う機械では上条のチカラを計ることなどできない。よって不幸にも上条は最強クラスの右手を持っているのに無能力者（レベル0）扱いなのである。

「……、楽しそうだよね」

と、不意にステイルは双眼鏡も使わずに500m先を見て呟いた。

「楽しそう、本当に本当に楽しそうだ。あの子はいつでも楽しそうに生きてる」

重いため息のように吸っていたタバコの煙を吐く。

神裂はステイルの後ろから500m先を眺める。双眼鏡など使わなくても、視力8・0の彼女には、少年の頭にかじりついている少女と、両手を振り回して暴れている少年、そんな二人を笑いながら眺めている神野の姿が窓から見えた。

「複雑な気持ちですか？

かつて、あの場所にいたあなたとしては」

「……いつもの事だよ」

ステイルはまさにいつも通りに答えた。

「どっぷり感傷に浸ってるとこ悪いんだけどさ」

不意に後ろから声がした。ステイルと神裂は慌てて後ろを振り返る。そこにはさっきまで500m先でステイル達が見ていたはずの神野

真の姿があった。

「あれ？ちょっと空気読めてなかったか？だけど盗み見は良くねえんじゃないか？」

「ッ！！気づいていたのか！？」

「アホ垂れ。よく考えろよ？お前から見えてるってことはこっちからお前らは見えるんだっつもの」

だが場所が分かっていたステイル達と違い、神野はなんのヒントもなしに二人に気づいたようだ。

ステイルはルーンのカードを、神裂は腰の日本刀の柄へと手を伸ばす。

「ちょ、ちょっと待て。別に今俺はお前らとやり合いに来たんじゃねえ。だから落ち着け、な？」

神野はそう言って戦意がないことを証明するかのように両手を挙げた。

「ならば、何の用だと言うのですか？」

神裂が尋ねる。

「神裂：久々に会ったのに挨拶もなしかよ。んな事より、確か、そろそろだよな？まあ、だからお前らもこんなところにいんだろうけど。もう一度確認させてくれ。」

本当にやるのか？」

会話の内容は分かるものにしか分からないだろう。しかし、ステイルと神裂はそれで全て理解したようだった。

「もちろん、と言わせてもらいましょうか。」

そうしなければあの子は死んでしまう」

そっか、と神野は意外とあっさりと返した。

「だけど俺はアレには反対だ。別の方法を探る。後、当麻やインデックスに手え出したら今度は容赦はしねえ。完全に叩き潰すからそう思えよ」

そう言って神野は去っていった。

「別の方法？ そんなことであの子が救われるなら僕達は苦勞なんてしないさ」

ステイルは吐き捨てるように言った

第12章 たったそれだけなんだろう？（後書き）

これで一旦魔術は休憩。次からは『レベルアップ幻想御手』の解決までやります
！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1212z/>

とある聖人の風紀委員

2011年12月19日23時01分発行